グローバル関係学 Online Book Launch

シリア知識人との対話

ヤシーン・ハージュ・サーレハとサマル・ヤズベク

序

二〇二〇年は、新型コロナウイルスのパンデミックによって世界の日常が大きく変容した年として、歴史に刻まれることとなった。国境を越えた移動ができなくなったことで、日本を離れた地域の研究にたずさわる我々は、手足をもがれたような状態に陥った。現地調査に赴くこともできず、海外からの招聘事業も中止に追い込まれた。そんな折、文部科学省新学術領域研究「グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて――関係性中心の融合型人文社会科学の確立」（平成二八年度～令和二年度）の代表を務める千葉大学の酒井啓子氏から、新刊書を語り合うブック・ローンチをオンラインでやってみようという提案があった。

この研究プロジェクトは、国境を越えた紛争や難民問題、自然災害など、現代のグローバルな危機を関係性中心の視座から捉え直すことで、従来の方法論ではみえなかった関係性をみえるようにする、「グローバル関係学」という新しい学問の構築を目指すものである。そして新型コロナウイルスの感染拡大は、まさにそうしたグローバルな危機の最新の事例といえる。いつ収束するのか先が見えない危機の只中で、先送りや待機の姿勢をとり続けるのではなく、この状況だからこそできることに一歩踏み出そうという提案は、まさに我々の研究プロジェクトの趣旨にかなったものだった。また、オンライン開催としたことで、地方や海外の在住者を含む多数の参加を得ることが可能となり、これからの研究集会のあり方に新しい方法論を提起することにもつながった。

第一回目のオンライン・ブック・ローンチは、今年六月に日本語訳が刊行されたヤシーン・ハージュ・サーレハ著『シリア獄中獄外』を題材に、八月三日に実施された。第二回は、今年三月に日本語訳が刊行さ

れた、サマル・ヤズベク著『無の国の門――引き裂かれた祖国シリアへの旅』を題材に、九月一五日に行われた。本書はその二回の記録に、著者二人へのオンライン・インタビューの内容を加えたものである。

いずれの回もグローバル関係学Ｂ０１班「規範とアイデンティティ――社会的紐帯とナショナリズムの間」が主催し、研究分担者を務める山本薫が司会進行を担当した。第二回目については、文部科学省科学研究費基盤Ａ「イスラーム・ジェンダー学と現代的課題に関する応用的・実践的研究」も主催に加わり、文部科学省科学研究費基盤Ａ「トランスナショナル時代の人間と『祖国』の関係性をめぐる人文学的・領域横断的研究」が両方の共催に加わっている。

第二回目のブック・ローンチの題材とした『無の国の門――引き裂かれた祖国シリアへの旅』の著者サマル・ヤズベク氏については、今年三月にグローバル関係学とイスラーム・ジェンダー学とで日本に招聘する予定であったのが、新型コロナのために延期となっていた。シリアの危機を世界に伝えてきた著名な作家であり、フェミニズムの活動家でもあるサマル氏の言葉を、直接日本に届ける機会は逸してしまったが、なんとかそれに準じるものとして、オンラインでのインタビューを『シリア獄中獄外』の訳者である岡崎弘樹氏に依頼した。その一部は当日に放映し、本書にはインタビューの全体を掲載している。このインタビューが非常に示唆に富んだ内容で、参加者からも高評価だったことから、『シリア獄中獄外』の著者ヤシーン・ハージュ・サーレハ氏へのオンライン・インタビューを、同じく岡崎弘樹氏に依頼した。素晴らしい発言を引き出していただいた岡崎氏に、深く感謝申し上げる。

二回のブック・ローンチのいずれもがシリア人作家の著作であったことは、意図した結果ではないが、必然であったともいえる。二〇一一年の民衆蜂起に端を発したシリア危機は、今世紀最大の人道危機へと発展した。シリア危機は一国だけの問題ではなく、複数の国家的・非国家的主体が複雑に関係し合う、まさにグ

ローバルな危機である。その危機の只中を生きる人々の声を拾い集め、また個としての思索を深めてきた二人のシリア知識人の言葉に触発されながら、様々な時代や地域の経験をパネリストたちが縦横に語り合った記録である本書が、「みえない関係性をみえるようにする」というグローバル関係学の成果の一端を示していれば幸いである。

なお、本書はグローバル関係学Ｂ０１班「規範とアイデンティティ――社会的紐帯とナショナリズムの間」の助成で作成された。

二〇二〇年一二月　山本　薫

目次

序……山本　薫　2

第一部　ヤシーン・ハージュ・サーレハ『シリア獄中獄外』を読む

1　著者からのメッセージ……8

2　シンポジウム

2―1　発表……岡崎弘樹（日本学術振興会研究員）　29

2―2　コメント1……鵜飼　哲（一橋大学名誉教授）　41

2―3　コメント2……酒井啓子（千葉大学教授）　48

2―4　ディスカッション……57

2―5　アフタートーク……72

第二部　サマル・ヤズベク『無の国の門――引き裂かれた祖国シリアへの旅』を読む

3　著者からのメッセージ……80

4　シンポジウム

4―1　発表……柳谷あゆみ（東洋文庫研究員）　103

4―2　コメント1……岡　真理（京都大学教授）　111

4―3　コメント2……ナジーブ・エルカッシュ（ジャーナリスト）　118

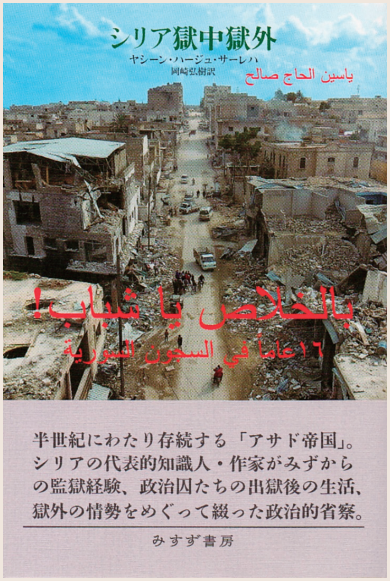
4―4　ディスカッション……128

4―5　アフタートーク……138

パネリスト紹介……148

第一部

ヤシーン・ハージュ・サーレハ『シリア獄中獄外』を読む



【著者プロフィール】

ヤシーン・ハージュ・サーレハ（Yassin al-Haj Saleh） 作家・ジャーナリスト。一九六一年、シリア・ラッカ生まれ。医学部に在学中、反体制組織に所属したとして逮捕され、一九九六年までの十六年間を獄中で過ごす。二〇〇〇年代にシリアやアラブの政治・社会・文化に関する論考を汎アラブ紙に寄稿するようになり、二〇一一年以降はシリア革命の代表的知識人として論説が世界中のメディアに掲載される。二〇一三年に国外脱出し、現在はベルリン高等研究所研究員としてドイツに在住。著書、受賞歴多数。

1　著者からのメッセージ

聞き手　岡崎　弘樹

岡崎　『シリア獄中獄外』の日本語訳を読んで、シリアにいっそう関心を持ってくださった方がいます。シリアの監獄に関する書物だということで、多くの読者は拷問や暴力の描写を予期するわけですが、本書ではほとんど触れられていません。こうした特徴を持つ本書の日本語訳の出版に際し、シリアをあまり知らない方へも含めて日本語の読者へのメッセージを頂けますでしょうか。

サーレハ　一部の日本語読者が拙著に関心を寄せてくださるのは嬉しいです。実際のところ、本書では拷問について言及することを避けました。二十歳で収監され、その後十六年にわたって獄中生活を強いられる中で、自分が自立しなければならないと考えていました。私や同僚にとって、この長い期間、どのように苦しい生活を成り立たせるかが重要でした。かかる自立を求める中で、アレッポのムサッラミーヤ刑務所やダマスカス郊外のアドラー刑務所、最後のパルミラ刑務所において個人的な歩みがありました。この歩みを描きたいがゆえに、尋問や拷問については書かないよう努めました。後の論考では拷問について書いたものもありますが、本書においては精神の解放の歩み、抵抗の歩み、長期収監によって奪われた人生の再開を描こうとしました。

本書でも触れていますが、当時二十代であった私にとって、他の人生はありませんでした。最初の六年間は二十代前半の若者でした。ですから本書は自身の物語を寄せ集める試みであり、監獄の書物というよりは、はるかに抵抗と自由に関する書物でした。自分がどのように変わったのか、自身の精神にある監獄を乗り越えたのかについて書いたのです。こうした考えが日本語読者に伝わったのであれば、嬉しいです。

また、批難を全面に出したり、暴露したりするような論調をとることも避けました。それは本書にはふさわしくありませんでした。反体制派の立場をとる作家は体制の犯罪や拷問、陵辱、虐殺に言及するものですが、本書ではこれらに触れる気はありませんでした。私や同世代、同僚による、自由や人間性の剥奪への抵抗こそが主題でした。

岡崎　本書はフランス語にも訳されていますが[1]、フランス語読者の反応はどんな感じでしたでしょうか。

サーレハ　フランスの場合、シリアに関する情報は多く、アラビア語の文学や著作の翻訳が盛んです。シリア問題への関心も高いので、私はパリで開かれたいくつかのイベントに参加しました。一方で、日本で本書が読まれるということは私にとっていっそう新鮮です。私はフランスではある程度知られていますが、日本で私やシリアについて語られるということが嬉しいです。

『シリア獄中獄外』フランス語版

岡崎　シリアに関する固定観念を多少なりとも打破することへの貢献という意味でも、本書は重要だと思います。

サーレハ　それこそが、私が意図した方向性でした。一部で英雄視されてきたシリアの政治囚を、人間的に描くことを目指したのです。尋問から数日と数週間、ならびにパルミラ刑務所に収監された最後の厳しい一年間を除く大半の時間において、求められたのは生活上の闘いでした。プライベートの確保のために闘い、監獄で人生を終えるのではなく、出獄後に新しい、より良い人生を歩むために、自立するために闘わなければなりませんでした。当時は、こうした課題に自覚的であったというわけではありません。というのも、獄中生活で最悪だったのは、いつ釈放されるか分からなかったということです。本書で述べているように、収監されて十一年四ヶ月して裁判所に引き渡され、その二年後に刑期十五年という判決を受けるわけですが、

刑期を終えても釈放される保証はなかったのです。ですから、当時自分の状況を認識することは不可能でした。ですが、同僚と試みたのは獄中で奪われた人生をプラスに変えるということでした。その意味で拙著は、拷問や暴力、野蛮さ、憎悪を描くいわゆる「監獄文学」というよりは、抵抗と解放の歩みを描くものです。

岡崎　二〇〇〇年代前半の論考には、元政治囚と体制との和解や相互理解への呼びかけがみられるのは興味深いです。実際、この時期にシリア社会に和解の雰囲気はあったのでしょうか。

サーレハ　「和解」というわけではないでしょう。しかし、私は二〇〇一年に「国民和解」のアイデアを提起した一人でした。一九八〇年代に痛ましい状況に陥り、約二十年間にわたって拘束や拷問、憎悪、処刑、殺害、虐殺、そして宗派主義を背景とする諸問題が続きました。とはいえ、新しいシリアを創るべくこれらを乗り越える必要があったのです。「パルミラへの道」（第二章）や「監獄の生活と時間」（第三章）を書いたときに、私は体制を「敵」とはみなしていませんでした。極めてひどい扱いを受け、嘲られ、侮辱されたにもかかわらず、過去を水に流す用意がありました。これらの主題については当時、汎アラブ紙で私の実名で多々書きました。私たちは体制を「敵ではない」として受け入れたのですが、体制の側は私たちを受け入れず、敵とみなし続け、過去の頁を閉じて再出発する上で、たとえ小さな窓口さえも開くことはなかったのです。私や仲間たちは和解の用意があることを示し続け、体制が私たちを敵視しないように望みましたが、実際のところ無駄でした。

1　*Récits d'une Syrie oubliée: Sortir la mémoire des prisons*, Paris : Les Prairies Ordinaires, 2015.

岡崎　誰か体制側で国家の要職にあったり、高級将校であったりする方が、具体的に和解の意思を示したり、サーレハさんと直接話すようなことはあったのでしょうか。

サーレハ　全くありませんでした。全くもってそんなことは起こりませんでした。巨大な権力と莫大な富を手にして「誇り」とし、それに執着している集団は、市民と話し合うことなどありません。和解への呼びかけであれ、過去の収監問題に関してであれ、体制が交渉を受け入れることはありませんでした。おそらく体制に近い人々との何らかの交渉はあったのかもしれませんが、私たちにできることは「公的な課題」を提示することだけでした。

公式メディアで報じられる者の中で、国民和解を語るような人物は全くもって存在しませんでした。そんな人の名前を挙げることはできません。もしかしたら私の書いた文章が、体制に近い一部の集団にまで届いたのかもしれません。しかし、体制派の一部は私たちにいっそう敵意を示すようになりました。彼らは私たちを「公的な課題」を提示する者ではなく、「私益を追求する過激な者たち」と考えるのです。これが彼らの思考パターンです。一部には私たちに多少の善意を示す者がいたのかもしれませんが、「敵意を示してきた過去を清算しなければならない」とはっきり口にする勇気に欠けていました。国家の要人であれ、政治家であれ、治安機関関係者であれ、体制支持者であれ、私たちと積極的にやり取りするということはありませんでした。

岡崎　将校の中には不当な収監の過去に対して補償を行う意志を示す者もいたという記述がありましたが、それは伝聞情報だったのでしょうか。

サーレハ　そうですね。実際のところ、インターネット系のメディアでも報じられていました。ですから私の記述も、多少自立性を示しながらも制限されていた、当時のインターネット系のメディアに依拠したものです。一部の元政治囚はこうした課題に取り組んでいまして、最初の提案として、体制が過去の長期収監者に補償を与えるというものがあったのです。とはいえ、それが何ら実現することはありませんでした。

岡崎　二〇〇〇年代後半の論考では、国民和解など不可能という雰囲気に徐々に変わっていった感じがよく出ていますね。いつ頃から和解の困難さを感じ始めたのでしょうか。

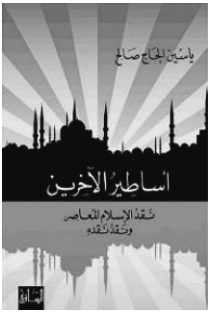
サーレハ　「ダマスカスの春」[2]が終わった頃からです。「ダマスカスの春」は二〇〇一年九月くらいまで一年程続きましたが、「新しい時代」への期待感は薄れ始めました。とはいえ私はしばらく前向きであろうとしました。また自分の実名で記事を率直に書き、国内で生活を続けたいがゆえに、自己検閲にも努めました。アラブ世界や「中東地域」、「第三世界」（苦笑）における一般的な事柄に抽象化するのではなく、シリアのことについて具体的に書きたかったのです。変にぼかして書きたくはなかったのです。その自己検閲ゆえに、一部の表現を省いたりもしました。途中まではそういう形で続いたのですが、だんだんと私も根本的な批判を試みるようになりました。二〇〇四年から二〇〇五年くらいまでが最後の期待感を維持していた時期でした。その後、体制は、私たち皆を完全に敵視するようになりました。最終的にシリアで革命が生じた

2　二〇〇〇年六月にハーフェズ・アサドが死去した後、バッシャール・アサド新大統領のもとでの民主化推進を求めた有識者中心の改革運動。

のも、その結果でした。シリアの一般市民を危険分子や敵とみなして力ずくで抑え込もうとした結果です。

岡崎　イスラーム主義者の問題については、二〇〇〇年代前半にはあまり書いてなかったように思います。

サーレハ　特に二〇〇七年頃から多く書いています。二〇一一年に出版された『引き継ぎし者の神話』[3]は、イスラーム主義に関する論考をまとめた作品です。同書は革命勃発後まもない時期に世に出ましたが、すべて革命以前に書かれた論考でした。出版当時、まもなくシリアが大きく変わっていくと感じていましたので、出版するのに適した時期だと思ったのです。やがて別の段階が訪れると感じていました。『シリア獄中獄外』（原題『みなさん、終わりにしよう』）も同時期に出版しましたが、同じ時期に新世代の若者が拘束され、収監され、拷問されていたという背景がありました。いずれにせよ、シリア人作家であれば、イスラーム主義者やイスラームの一般的課題について考えないということはありえません。政治について考える者であれば、必然的に取り組まざるを得ない主題です。



『引き継ぎし者の神話』

『みなさん、終わりにしよう』

岡崎　たとえば「パルミラの道」という論考で、最後に出獄したムスリム同胞団員の元収監仲間の話が出てきます。二〇〇七年以前であれば、サーレハさんはイスラーム主義者の前向きな側面というか、人間的な側

面にいっそう注目していたようにみえます。「厳しいパルミラ監獄に耐えられたのは、彼らの信仰のおかげだ」と述べています。しかし、その後の論考ではイスラーム主義者にだんだんと批判的になりますね。

サーレハ　そうなんです。結局、私は体制との関係と全く同じ変化を、イスラーム主義者との関係においても経験したのです。私は二〇〇〇年代初頭から公に執筆してきましたが、当初は体制を敵とみなしていませんでした。イスラーム主義者に対しても同じです。敵視することはなかったのです。同じ監房ではなかったにせよ、私たちはイスラーム主義者が収監された同じ時期に獄中生活を送ったのです。しかも、イスラーム主義者は私たち世俗主義者よりもはるかに厳しい環境を強いられました。シリア人として、作家として、彼らの権利や人間性を守ることは義務でした。私には自分の意見を表明する機会がありましたから。

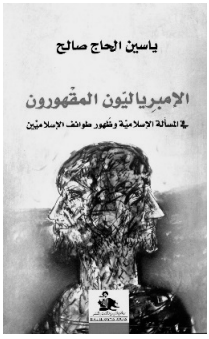
私たちは元共産主義者でしたが、別に共産主義についてのみ語りたいわけではありません。リベラリストがリベラリズムの課題のみを語るわけではありません。シリア人作家として、すべてのシリア人の課題や権利、自由、そして人間としての価値について主張したかったのです。ですから、「パルミラへの道」で、「イスラーム主義者が過酷な収監に耐えたのは深い信仰心のおかげだ」と書いたのです。それはそれで正しかったと思います。

しかし、状況は徐々に変化しました。二〇〇三年のイラク占領後に、アルカーイダとサッダーム・フセイン政権の残党が手を組む中で、野蛮なイスラーム主義者が生み出されました。実際のところ、激しい暴力に

3　『引き継ぎし者の神話――現代イスラーム批判および批判の批判』（二〇一二年）はイスラームをめぐる諸問題を扱いつつ、その開かれた思考様式を模索した政治エッセイ。

訴える犯罪者でした。私は公的な課題や政治問題に取り組んでいましたから、その現実に目を向けざるを得ませんでした。かくして、イスラーム主義者にいっそう批判的となったのです。イスラーム主義者の公的な活動を擁護するという立場でしたが、そのときはムスリム同胞団員を意図していたのです。しかし、サラフィー・ジハード主義者が現れるようになってからというもの、批判的になるのは必然でした。『引き継ぎし者の神話』の大半の論考はこうした文脈で書かれたものです。イスラーム主義者の基本的人権を擁護するけれども、彼らの思考様式を批判し続けるという立場です。私は個人的には無信仰ですが、イスラームはシリア国民の遺産ですから、イスラーム主義者の権利と宗教的立場、具体的な実践を尊重しています。しかし、彼らが他の人々の権利や存在、政治的な発言、実践を尊重するという条件付きなのです。イラク占領の頃からイスラーム主義者の野蛮さが露わになり、その影響はシリアにも及びました。私たちがイスラーム主義者を敵視しなくても、彼らが私たちを敵視したのです。こうした現実に対する認識が必要でしたが、私個人もISやイスラーム軍といったさまざまなイスラーム主義集団によって個人的に被害を受けたのです。

第一の有害な存在は体制でしたが、第二に有害な存在はイスラーム主義者でした。ですから、私は二つの闘いを強いられたのです。革命初期までは闘争の明確な相手は体制でした。しかし、革命が始まってから徐々に、闘争の明確な相手としてイスラーム主義者とも向き合いました。二年前に出版した『抑圧された者たちの帝国主義』[4]にて、新しい段階にあるイスラーム主義者が、帝国主義的な傾向と犠牲者たる性格を織り交ぜている問題を指摘しました。



『抑圧された者たちの帝国主義』

岡崎　この本は読みました。ちょうどお訊きしたかったところです。欧米でも日本でも、ジハード主義を研究されている専門家は多々いますが、本質主義的なアプローチをとっている場合が多いです。サイイド・クトゥブ、ウサーマ・ビン・ラディン、ザルカーウィーの思想といった系譜で議論を進めるのです。しかし、『抑圧された者たちの帝国主義』では別の視点から事態を分析し、あくまで旧来の帝国主義や独裁政権の権力との関係で論じています。欧米の主要な議論では、イスラーム主義者を生み出す帝国主義やローカルな独裁権力との関係に関する理論的考察が弱いように思います。アサド政権のようなアラブの独裁政権がいかにして欧米の「イスラーム恐怖症」を煽りつつ、国際社会の後ろ盾を得ているかといった視点はないのです。イスラーム主義に関する特に欧米や日本の分析には視点の欠如があると思います。

サーレハ　「欠如」どころではありません。痛ましい次元です。イスラーム主義をめぐって何か重要な問題を指摘しようとしても、欧米の多くの人々には心理的な、文化的な歯止めがかかっているのです。中東地域をめぐる諸課題、たとえばパレスチナ問題、イスラーム主義にかかわる問題については何かしら重要な見方を示すことができないのです。欧米は私のような人物から多くを学ぶことはありますが、同時に中東地域やアラブ、イスラームをめぐる諸課題への理解に関しては悲劇的な、極めて脆弱な状況があります。

こうした課題について私の分析が欧米の分析よりも劣っていると感じたことはありません。短絡の論理は横行しています。イスラーム主義者の問題を宗教テキストに依拠して分析したり、善意をもって社会学的な

4　『抑圧された者たちの帝国主義』（二〇一八年）はアルカーイダやISに代表されるイスラーム主義者が抱く帝国主義的な観念の問題について考察を進めた作品。

アプローチをとるものの、やはり単純な図式で理解するのです。『引き継ぎし者の神話』と『抑圧された者たちの帝国主義』で私が取り組んだのは、イスラーム主義をめぐる問題の構造分析を発展させることです。イスラーム主義者が現れ、サラフィー・ジハード主義と呼ばれるようになる一方で、欧米の「イスラーム恐怖症」が存在します。この事態の両面を切り離して検討することはできないのです。

最近、ジャード・マジド[5]とファールーク・マルダム・ベイ[6]とともに、ルモンド紙に連名の記事を書きました。[7]私が考え始めたのは、イスラーム主義について語る場合には、彼らの「想像」のあり方を分析しなければならないということでした。それは栄光や偉大さ、世界の征服、支配、広域の「イスラームの家」といった「帝国主義的な思考様式」であるとともに、イスラーム初期の帝国時代の、また近代において欧米の帝国主義の支配下に置かれた時代の「記憶」です。

近代のイスラームは二つの要素で成り立っています。一つは「抑圧の経験」という要素です。私たちは植民地主義の支配と占領、差別にさらされましたし、パレスチナにはイスラエルという国家が樹立されました。さらに欧米諸国は、アラブ諸国の野蛮で腐敗した独裁体制と同盟を組みました。もう一つは、それらの抑圧からの「解放」という要素です。しかし、その解放の段階において、イスラームの支配を求める帝国主義的な思考で自己正当化を図るがゆえに、あらゆる解放の価値を喪失するのです。イラク占領からしばらく、さらにシリア革命以後の段階において、イスラーム主義者が持ちうる解放の全体的なエネルギーは、残念ながら極めて弱いのです。

イスラームは私たちの地域において偉大な遺産です。にもかかわらず、現在彼らが抱えている構造は解放の方向に向かっていないのです。重要なのは、イスラーム主義者をイスラーム主義から解放することです。『引き継ぎし者の神話』で論じたのは、イスラームをイスラーム主義者に委ねてはならないということです。

私は無信仰であり、宗教の教えについて語ることはできません。しかし、私たちの間に間違いがあるとすれば、イスラーム主義者を批判しつつ、「産湯とともに赤子を流す」ように宗教や遺産たるイスラームを全面的に敵視し、自らを「進歩的」と考えてしまうことです。

「イスラーム恐怖症」やイスラーム教徒へのレイシズムを煽る人々は欧米に存在しますが、「エリート主義的なレイシズム」はまさにシリアに存在します。アラブ諸国にも多々存在します。エリート（選ばれし者）らが絶対的権力や富に固執しつつ、一般市民を「後進的」、「イスラーム的」、「狂信的」とみなして支配しようとするのです。かくして力ずくで、弾圧で、拷問で支配しようとするのです。

岡崎　レイシズムは欧米だけでなく、シリアにも「エリート主義的」な形で存在するという指摘は重要です。サーレハさんの著書の中では、ジグムント・バウマン[8]の液状化する社会論などの影響も見られますね。レイシズムが欧米から中東地域に「クローニング」（模倣）される状況を理解するのに有用だと思います。

サーレハ　その通りですね。「イスラーム恐怖症」は欧米に蔓延していますが、アサド政権やエジプトの

5　ジャード・マジド（一九七〇年〜）　レバノン出身、仏在住の政治学者。パリ・アメリカン大学教授。代表作に Ziad Majed, *La Révolution orpheline*, Actes Sud, 2014.

6　ファールーク・マルダム・ベイ（一九四四年〜）　シリア出身、仏在住の編集者、歴史家。

7　«Le nihilisme djihadiste prospère quand se ferment les systèmes politiques des pays à majorité musulmane», *Le Monde*, le 27 octobre 2020.

8　ジグムント・バウマン（一九二五〜二〇一七年）　ポーランド出身の社会学者。『リキッド・モダニティ――液状化する社会』森田典正訳、大月書店、二〇〇一年ほか邦訳書も多数ある。

シーシー政権などにとっても戦略の要でもあります。「イスラーム恐怖症」とは何でしょうか。それは、イスラーム教徒に害を与える一種のセクト（宗教宗派）主義あるいはレイシズムです。つまり「イスラーム恐怖症」は、シリアの宗教宗派主義や、イスラーム主義者の排除によるエジプトの政治生活の破壊と結びつきながら存続するのです。アラブ諸国においてイスラーム主義者を完全に排除しなかったような事例はありません。アラブ世界や中東地域は歴史的な危機にあります。というのも、このような大きな構造が存在する限り、いかなる問題も解決しないからです。

イスラーム主義者自身に問題があるのは確かですが、問題は入り組んでいます。アラブ諸国の体制は市民をファシズムによって痛めつけながら、国際的な後ろ盾を得ているのです。というのも、イスラーム主義者が野蛮さ、彼ら独自のファシズムを発展させたからです。

それゆえに私たちは歴史的な危機にあると、先日ルモンド紙で主張したのです。マルクスは「宗教は精神のなき状態の精神だ」と言いましたが、イスラームは「政治を奪われた状態の政治」です。イスラームをめぐってあらゆる形で政治が奪われているのであれば、イスラーム主義はいっそう蔓延します。欧米諸国はアラブの独裁政権を支援しイスラーム主義に対抗しているつもりでしょうが、「安全保障上の」イスラーム主義を駆逐しながらも「社会的、政治的に」イスラーム主義を植え込んでいるのです。

イスラーム主義に対抗する「正しい政治」とは、民主主義です。人々が政治を支配することです。そこにはイスラーム主義者も存在しますが、他の競争相手も存在するのです。人々が自分の考えを提示し、道徳を示し、集い、政治を行います。リベラリストも、左派も、民主主義者も、民族主義者も集う中で、イスラーム主義者もその中の一つの政党や潮流を担うのです。決してイスラーム主義者が唯一の最大野党ブロックとなり、残りが泡沫政党という状態ではありません。人民が政治を支配する、つまり民主主義が必要なので

す。イスラーム主義者に対する「正しい政治」は、欧米諸国やアラブ諸国の体制が行っているようなものとは正反対の政治です。

岡崎　ムアーズ・ハティーブ[9]やジャウダト・サイード[10]に加え、『シリア獄中獄外』に登場するご友人のムハンマド・バッロさんなど、開けた知性を持ったイスラーム主義者はシリアに存在します。

サーレハ　いや、周知の方でなくても多くの市民がそうなのです。正常な政治が成り立てば、イスラーム主義者が穏健となるダイナミズムは生まれます。いかなる国においても社会や政治の正常なあり方が粉砕されると、過激主義のダイナミズムが生まれます。逆にもしシリアが民主的な国家となるならば、もし国家が独善的な支配を押しつけるような一つの勢力を抑制することができるのであれば、穏健な政治のダイナミズムを生み出すでしょう。

私たちに必要なのは、市民に平等を保障する近代的な「国民国家」です。「イスラーム国家」ではありません。思うに、シリア人の多数はイスラーム主義者ではなく、国を愛する穏健な市民です。多くの人々を過激主義に向かわせたのは、正常な政治や社会の激しい破壊が原因です。周知の方でなくとも、多数派の市民は開けた精神を持っています。シリアでイスラーム主義者は少数派だと思います。『抑圧された者たちの帝

9　ムアーズ・ハティーブ（一九六〇年〜）　シリアの技師およびイスラーム導師。二〇〇〇年代を通じて政府の腐敗を批判し、リベラルな有識者とも交流があった。

10　ジャウダト・サイード（一九三五年〜）　シリアのイスラーム思想家。コーカサス系でゴラン高原の出身。一九六〇年代から非暴力の思想を説いたことで知られ、二〇〇〇年代には市民社会の構築を目指す世俗主義的な有識者との連携を深めた。

国主義』でも論じましたが、イスラーム主義は宗教・宗派の一派のようなものです。

その登場により、欧米や日本のメディアが大騒ぎして、シリアの圧倒的多数派のようにみえるのかもしれません。しかし、チュニジアやエジプトで自由な選挙が行われましたが、エジプトでは投票率が五〇％程度で、そのうちイスラーム主義者が獲得した票は四〇％程度でした。つまりエジプト国民の二割の支持しか得ていないということです。チュニジアも同じく、総人口の二割から二割五分程度の支持です。その存在感は強力であるとはいえ、決して「圧倒的多数」ではないのです。

もしシリアで正常な政治が成り立つのであれば、最大多数は祖国愛と、憎悪を煽るケマル主義のような意味ではない世俗主義に基づいた勢力になるでしょう。つまり、バアス一党支配以前に存在したような勢力です。イスラーム主義を掲げる政党も二割程度の支持を得るでしょう。その支持は上下するでしょうが、概して徐々に下がっていくでしょう。エジプトのムスリム同胞団の事例からしても、国民の支持はどんどん下がっていきました。ムルシー大統領は追放されましたが、その政権が四年間の任期終了まで続いたとしても、イスラーム主義者への支持は国民の一割程度になったのではないでしょうか。

イスラーム主義者には「抑圧されている」という物語が必要です。「迫害されている」、「犠牲者である」ことを主張して、共感を得ているのです。シーシー政権の醜態はさておき、エジプトのイスラーム主義者ももはや共鳴されていません。現在、スンナ派であれシーア派であれ、イスラーム主義者は危機に陥り、ますます凋落しています。これは良いことです。暴力と野蛮に訴えるイスラーム主義者であれば、政治や社会に問題を引き起こします。もし他にオルタナティブや開けた展望があるのであれば、イスラーム主義者がますます支持を失うのは必然となるでしょう。

岡崎　イスラーム主義についてはよく分かりました。そもそもの問題たる独裁権力ついて聞かせて下さい。今年、大統領のいとこの大資本家ラーミー・マハルーフが追放されたという報道がなされ、大いに騒がれました。サーレハさんはかつてパリのアラブ世界研究所で、パレスチナ問題とシリア問題を比較しつつ、「ロシアによるアサド政権の支持は、米によるイスラエルの支持とは異なる」、「ロシアにとってアサド政権の存続は絶対的なものではないので、新しいダイナミズムが生まれる可能性はある」とおっしゃっていたように思います。[11] さて、マハルーフの状況が伝えられる今年に、シリア国内で新しいダイナミズムが生まれる可能性があると思いますか。

サーレハ　残念ながら、その可能性は見えません。政治構造全体という次元でのダイナミズムが生まれる可能性は見えません。おそらく、アスマー・アサド大統領夫人の親族がラーミー・マハルーフにとって代わるのでしょうが、結局、バッシャール大統領とその家族をはじめとする、アサド一族が牛耳っている資本の内側での話です。一つの手からもう一つの手に渡っただけで、他に何も変わっていません。

アラブ世界研究所で発言したのは二〇一五年春だったと思いますが、要するにロシアの軍事介入（同年九月）の前の話です。今日の状況からすれば、おそらく私の分析が間違っていたのかもしれません（苦笑）。現在ではロシアによるアサド政権への執着は、米国によるイスラエルへの執着にほぼ等しいです。バッシャール・アサド大統領である必然性はないのかもしれませんが、ロシアが彼を見捨てるような予兆は何らありません。

今日、シリアの真の支配者はロシアです。シリアはロシア、さらにイランに保護されながら大きな存在と

11　二〇一五年四月一〇日に『シリア獄中獄外』のフランス語版が出版されたのを記念して、アラブ世界研究所で講演会が行われた。以下のサイトを参照。https://www.youtube.com/watch?v=tdtsuOuPKIs&feature=youtu.be

化し、アサド政権もその二つの庇護国の間でゲームを続けています。さらに近隣諸国のヒズボラや、人民結集部隊や「アサーイブ・ハック」といった親イランのイラク民兵組織、ＰＫＫなどのクルド人組織が加わって、シリアは利用され放題の国家となっています。トルコも域内の主人を演じ、多数のシリア人を傭兵として利用しています。

残念ながら、シリアの社会は完全に破壊されました。私たちが考えていた以上にはるかに変わってしまいました。かつて私たちはシリアを自分たちの手に取り戻す希望を抱いていました。私たちの想像以上に、おそらく体制側が想像していた以上に変わってしまったのです。シリアは三つか、四つの国家に分割されました。トルコに、米国やその代理人たるＰＹＤ（クルド民主統一党、ＰＫＫの分派）に、ロシアとイランに保護されたアサド政権に、そして半世紀以上前からゴラン高原をイスラエルに、その他さまざまな占領勢力によって引き裂かれました。

こうした状況は向こう数十年にわたって続く可能性があります。米ソですら冷戦時代にドイツを四十年以上にわたって分割していました。シリアでも同じことが起こるかもしれません。イドリブにはアルカーイダ系とも言われる「シャーム解放機構」が残っており、例外的な状況かもしれませんが、最も脆弱なスポットです。ですから、現状が数十年続く可能性があります。

かくして私はシリアの状況に関する二つの言説を区別しています。一つは、大統領や体制と、それに対抗する反体制派といった従来の悪しき言説です。もう一つは、シリアを世界の問題と結びつけるといった正しい思考に基づく言説です。世界はシリアであり、シリアは世界であるという考え方です。人口の約三％が殺され、約三〇％が避難民となり、約九〇％が貧困や飢餓に陥っています。国土は五つの大国に占領されています。つまりシリアは「世界の基準」、あるいは「分割された世界の暗喩」です。同時に世界は徐々にまる

で「シリアの拡大図」のようになっています。

アメリカのトランプ政権であれ、ブレクジットであれ、ハンガリーやポーランドにみられるような右派ポピュリズムの波であれ、ロシアのプーチン政権やトルコのエルドアン政権であれ、「ジェノクラシー」[12]が世界を席巻しています。民主的に選ばれた多数派というよりも、文化的なヘゲモニーを握る集団によって、それ以外を根絶するような支配形態です。「白人の支配」やイスラエルの「ユダヤ人国家」、欧州やユダヤ教・キリスト教の「文明」による支配でありますが、中東地域におけるイスラーム主義も同じ論理です。「ジェノクラシー」は民主主義に敵対するだけでなく、「ジェノサイド」を引き起こす可能性があります。特定の血統や民族、宗教に依拠した集団的傾向を強めれば強めるほど、大量虐殺を生み出す可能性が開かれるのです。

岡崎　つい先日、新作『新しいスルタン――シリアにおける宗派主義、国家の民営化、国民主義とシチズンシップの危機』を出されましたが、この問題を扱っているのでしょうか。

サーレハ　本書はシリアの諸課題に関する理論的な試みです。世襲による「新スルタン主義的国家」が、さまざまなアイデンティティ、すなわち宗教・宗派主義を引き起こしつつ永続するという問題に関する分析です。国を内戦状態にさせ、未来に開かれていない戦争を永遠に続けると

『新しいスルタン』

12　「ジェノクラシー」（genocracy）とは、特定の発生起源を有する一つの集団が、他の諸集団を差別や暴力を用いて統制し、常に「ジェノサイド」（genocide）に発展する可能性を内包している支配形式。サーレハはこの概念を二〇一九年九月ごろから論考で用い始めた。

いう問題への理論的考察です。世襲によって、シリアはアラブの他の人民共和国とは異なりました。王国としては、サウード家のサウジアラビア王国、サバーハ家のクウェート、アラブ首長国連邦、ハーシム家のヨルダンがありますが、シリアはもともと人民共和国であったにもかかわらず、血統主義が持ち込まれました。シリアの真の憲法は、「世襲」です。この意味で、「新スルタン主義」と名付けているのです。問題は、オスマン帝国やそれ以前のカリフ制時代のスルタンとは異なり、新スルタン主義国家は大量虐殺を行うことができるということです。それは実際に行われたのです。

岡崎　「新スルタン主義」については、シリアにいた時代から書いていますよね。サーレハさんは二〇一三年秋にはシリアを出ざるを得なかったわけですが、国内に留まっていた時とは異なり、国外で亡命者として暮らす時に書く際の困難さはありますでしょうか。理論的考察にいっそう偏っていくといった問題などはありますでしょうか。

サーレハ　それは本当に私が頭を悩ませている問題です。国外生活が長引き、実際に国内で生じていることの詳細は分からないのです。ニュースを追っており、事態を把握していますが、同時に多くのことは分かりません。それは作家として大きな損失です。私の観察や考察、個人的経験が大きな関心を呼んでいるにもかかわらず、国内にいないのは大きな損失です。それを補うべく、私は理論的考察を深めようと試みていますし、情勢を追ってもいますし、この損失を認識しています。しかし、真の意味で補うことはできません。

それは監獄にいた時と同じようなものです。失った青年時代を補うことなど不可能です。亡命者となれば国内の生活を補うことはできません。とはいえ、苦しい状況の中でも最善を尽くすことで前向きであろうと

しています。個人としての苦しみもありますが、もはや個人的というわけではありません。妻や友人、兄弟が行方不明のままですが、もはや私的な課題ではありません。この境遇を受け入れていますし、それが私のアイデンティティを形作っています。公的な役割においても同じことです。

岡崎　シリア国内の同僚や友人とも連絡は続いていますか。

サーレハ　国内の知り合いとはそれほど連絡しているわけではありません。実際のところ、多くは国内で行方不明の状態にあるか、多くの友人が国外に脱出しています。国内に留まる少ない友人と連絡はありますが、十分ではありません。シリアに限らないとは思いますが、社会がズダズダに分断された場合、心理的あるいは思想的に互いに引き離され、その分断を克服することは難しいです。できるかぎりなんとかしたいと努力するのですが、亡命や移民といった状況に置かれれば、国内と国外で、あるいは亡命者の集団同士での関係は疎遠になり、断絶を生み出します。かかる環境に降伏しているわけではないのですが、実際に生じている事態を認識しています。解決策を教えていただけませんでしょうか（苦笑）。

岡崎　最後の質問になります。SNS上でしたか、サーレハさんはサアダッラー・ワンヌースの「人間は希望に囚われし存在だ」[13]という名言に異議を唱えつつ、「希望は何よりもまず創り出すものだ」と主張された

13　サアダッラー・ワンヌース（一九四一〜一九九七年）シリアの劇作家。代表作に『六月五日のための晩餐』（一九六九）など。この発言は、UNESCOの「一九九六年世界劇場講演会」において「対話の渇望」という題目で講演した際のもの。Sa'dallah Wannous, *Sentence to Hope: A Sa'dallah Wannous Reader*, Yale University Press, 2019, pp.387–390を参照。

ことがありました。これを未だに実践されているのでしょうか。

サーレハ　もちろんです。ワンヌースの表現は非常に有名で、もともとは「人間は自由を運命づけられている」（L'homme est condamné à être libre）というサルトルの名言に似せたものです。ワンヌースがこの言葉を残したのは、ほとんど希望がなかった一九九〇年代でした。極めて重要な一言でした。

とはいえ、ちょうど二日前に希望について少し書いたところなのですが、私たちはますます絶望を生み出すような状況にあります。不可能であるという感覚はいっそう強まっています。出口や約束、希望はまったくありません。公正や変化をもたらす約束はなく、逆にあらゆる悪事を果たした体制が存続し、保護されています。私たちは、自分たちに約束をすることができません。というのも、「これまでのことが実は最悪ではなかった」、すなわち「これからもっと最悪な事態が生じるかもしれない」と予期されるからです。私の世代が経験した「最悪」、そして二〇一一年以降に経験した「最悪」を超えるさらなる「最悪」と「醜悪な未来」が今後訪れるかもしれないからです。ですから私は世界を激しく非難するのです。シリア人は希望を抱くことを完全に奪われてしまったからです。

しかし、まさにそれがゆえに、希望を擁護し、希望を創り出していかなければならないのです。収監と革命という二回にわたって厳しい状況を強いられてきたわけですから、絶望の中の希望を擁護せざるを得ません。希望は、満たされた生活をしている人間ではなく、打ちひしがれた人間こそが必要としています。シリア人が囚われているのは希望ではなく絶望です。とはいえ、抵抗し、希望を創り出していかなければならないのです。

2　シンポジウム

2－1　発表　岡崎　弘樹（日本学術振興会研究員）

皆さま、どうもこんにちは。岡崎弘樹です。今日はヤシーン・ハージュ・サーレハさんの著書『シリア獄中獄外』についてお話しする機会をいただき、誠にありがとうございます。『シリア獄中獄外』という邦題は、みすず書房の優れた編集者の方に付けていただきました。と申しますのも、私は二〇〇三年から二〇〇九年にかけてシリアに滞在しておりまして、その後に進学したフランスの大学でも自分の指導教官がシリア出身のフランス国籍の方でした。タイトルはふつう出版社が付けますが、いずれにせよ私の方もどっぷりシリアに漬かり過ぎて、日本の皆さんに一番伝わりやすいタイトルがよく分からなかったのです。そうしたら編集者の方がぴったりのタイトルを付けてくださったということです。

早速ですけれども、いくつかスライドをお見せしながら話していきたいと思います。最初に紹介したいのは、徐勝氏の『獄中十九年――韓国政治犯のたたかい』（岩波新書、一九九四年）です。シリアの政治囚に関しては、日本でも知られていないことが多いと思いますが、日本で例えば、一九七〇年から八〇年代にかけての同じ時期に収監された元政治囚で、出獄後に経験談を書かれた事例としては、やはりこの徐勝さんの

『獄中19年
――韓国政治犯のたたかい』

『獄中十九年』というのが、思い浮かぶのかなと思います。[14]

収監時期については、ヤシーン・ハージュ・サーレハさんは一九八〇年から一九九六年ですが、徐勝さんの場合は少し早い一九七一年から一九九一年になります。それぞれ十六年間と十九年間にわたって収監され、青春時代を本当に全て奪われてしまいました。拘束された経緯はそれぞれ違いますけれども、今の香港と同じように、単に自由を求めて民主主義的な運動組織に参加したり、政権を批判する意見を表明したりという、元々はそれだけだったということです。ところがその後、その行為に対して全く釣り合わない、割に合わない経験というのを、青春の全てを失うような経験をされるわけですね。

ただし、この『シリア獄中獄外』という本は、一般的に収監の記憶を辿った著書とは多少異なります。実際、本書を手に取っていただければ分かると思いますが、第一章から第三章までは、徐勝さんが描いた『獄中十九年』にある程度近く、収監に至るまでの経緯や収監中の生活や苦悩、そして釈放に至るまでの流れを扱っています。ところが、第四章ぐらいから、十六年間の収監生活を経て、その後の生活はどうなったんだという話になっていくわけです。そこではいろんな課題があります。トラウマの克服とか、生活の立て直しとか、さらにはシリアの国とはどういうものなのか、元囚人にとって祖国とは何かといったテーマと結び付けながら論じていきます。また、文学とか社会思想とかにも話題が及ぶような広がりのある作品です。こうした意味では、素晴らしい日本語タイトルを付けていただいたとおり、まさに「獄中獄外」の物語なのです。二〇一一年のシリア民衆蜂起以降に関しては、アラビア語版の序文とフランス語版の序文などでも扱っています。

簡単に私と著者との出会いについて話させてください。二〇〇三年から二〇〇九年にシリアに滞在していたのですが、最初の三年間はダマスカス大学や在ダマスカス・フランス研究所に主に通っていました。加え

て、アラビア語のちょっと難しい文学とかを一緒に読んだりするために、短編小説家のイブラヒーム・サミュエル[15]さんのところに、週二回ぐらい通っていました。まさに私が住んだ二〇〇三年から二〇〇九年が、ちょうどこの著書の中にありますとおり、元政治囚コミュニティーを構成している面々が、公的な言論活動に関わっていた時期と一致していたのです。

シリアがそういう流れにあったところに加え、このサミュエルさんも元政治囚でありまして、私が関心を持てば持つほど、こういう人にも会わせてあげるよと紹介してくださって、どんどんネットワークが広がりました。この写真は二〇〇七年二月一四日のバレンタインデーでして、アラビア語で「愛の日」（イードル・ホッブ）とちょっと重い言い方なんですけど（笑）、そこで皆さんでお酒を持ち寄って大騒ぎしよう、ダブケ（アラブの伝統舞踊）で踊り明かそうという感じになりました。ただ、大騒ぎしているこの皆さん、かつて長い間収監されておりました。ヤシーン・ハージュ・サーレハさんも十六年収監されましたが、二〇一三年一二月にイスラーム主義者に拉致されていまだに行方

サーレハ氏と元政治囚の仲間たち

14 徐勝（一九四五年～） 元立命館大学特任教授。在日韓国人二世。祖国留学中の一九七一年に北朝鮮工作員の容疑で弟の徐俊植と共に韓国で逮捕され、十九年間を獄中で過ごす。

15 イブラヒーム・サミュエル（一九五一年～） シリアの短編小説家。一九七七～八〇年に収監生活。八八年に最初の短編小説集『重い足取りの匂い』を出版後、二〇〇二年までに四つの作品集を発表。

が分からない妻のサミーラ・ハリールさんも、一九八七年から一九九一年にかけて収監されていました。これはかなりプライベートな写真なので、ちょっと恥ずかしいんですけども、こういう感じでばか騒ぎしたい思い出がありました。

皆さん作家とか、劇作家とか、ジャーナリストですが、特に二〇一一年以降は、別々の国に離れ離れになってしまったり、サミーラさんのように、いまだに消息が分からないといった状態です。

『シリア獄中獄外』の第二章「パルミラへの道」という論考は二〇〇三年に書かれました。サミュエルさんにこの論考を手渡されて一緒に読みました。私はシリアに行く前は、社会科学系の大学で勉強していまして、社会思想系の本をいろいろ読んだというか、読まされました。ですので、この論考を読んだ時、かつて日本で丸山眞男という政治思想研究者が言った「悔恨共同体」という発想と同じではないかと思いました。[16] こうしてシリアの思想と日本の思想の共有点というものを自分なりに感じていったということです。

そんな出会いがあったわけですが、今ではかなり有名になったサーレハさんも、当時はハヤート紙やナハール紙、サフィール紙といった汎アラブ紙で書き始めて、すでにアラブの言論界の中では有名になっていたんですが、まだ欧米ではそんなに知られていませんでした。

それで最初のポイントとして強調したいのは、シリアを既存の、手垢にみちたイデオロギーで語ることの難しさということです。たとえば、第一章を読んでいただくと分かると思います。ちょうど昨日が一九九〇年八月二日にイラクがクウェートに侵攻して引き起こされた湾岸危機からちょうど三〇年にあたりましたが、この危機をめぐってシリアのアレッポの刑務所内で政治囚が全く二分してしまった模様が描かれております。サッダーム・フセインを間接的であれ擁護せざるを得ないという立場か、あるいはサッダーム・フセインがクウェートに侵略したことは間違っているのだから、アメリカ率いる有志連合の側についた方がまだいいの

ではないかという立場か。この分裂の中で、お互いがお互いにレッテルを貼って誹謗中傷に陥り、喧嘩になってしまったということです。なお彼らの議論の中では、侵略された当事国であるクウェートはあまり重要ではなかった、どうでもいい存在だったというくだりなどは、やはり最もリアルな描写かと思います。

これはどういうことかといいますと、要するにパワーポリティクスの中で、個人が意見を持つといっても、それほど何か確固たる基盤の上で表明される意見とはなりえないということです。「ハムレット的選択」とはよくいわれますけれども、「To be or not to be」というよりは、「Worse or worst」、つまり「まだマシか、最悪か」、「最悪を回避するためのマシか」という選択肢が突きつけられるのです。その中で、どうやって自分たちが、ある種の足場を確保するかという、そういう選択を常に迫られているという感覚ですね。サーレハさんだけでなく、多くの元政治囚の方と話す中で、その感覚を感じ取ることができました。

サーレハさんとお互いに家も行き来する仲になって、あるとき、こういう議論をしました。二〇〇八年のことですが、シリアとイスラエルがトルコを仲介として間接的に和平交渉に向けた話し合いを行っているという情報がリークされ、報道されたことがありました。そういうニュースが飛び交っていた頃に、ある日サーレハさんに「もし、イスラエルの大使館がダマスカスにできたら受け入れるの?」と少し煽る感じで尋ねたことがあります。その時、サーレハさんは「シリアの歴史や状況からして大多数は受け入れられないだろうが、自分は受け入れるだろう、受け入れざるを得ない」みたいなことも、ぽろっとおっしゃるわけです。こういうことは一切、公の文章にならないし、いろんな会話の中でその表情や話し方ひとつで感じ取る部分ですが、それは単なる「裏切り」とかという次元の話ではないということです。サーレハさんも当時、

16　丸山眞男「近代日本の知識人」、『丸山眞男著作集第十巻一九七二―七六』岩波書店、一九九六年、二五四ページなどを参照。

別にシリアを去る気もありませんでした。

当時、東の隣国イラクで米国によるイラク侵攻後の大混乱が続いておりまして、その一方で西の隣国レバノンでも、ハリーリー首相暗殺事件以降の混沌の最中にありました。こうした状況に囲まれる中で、シリアは今の状況を受け入れつつも、まだましな方向性を何かしら模索しなければなりませんでした。もしシリアの社会が世界に向かって徐々にではあれ、いっそう開かれるのであれば、よく言われますけども、「悪魔」とも手を結ばざるを得ない。極めてアラブ的な表現かもしれませんけれども、アメリカがたとえ「悪魔」と百も承知であったとしても、手を組むことは必然的に受け入れざるを得ないという状況です。実際、三十年前の湾岸危機というのはまさにそのとおりで、ハーフェズ・アサド政権も米軍側に与したわけです。それはハイポリティクスの次元でも、シリアの国家レベルでも実際に起こっているわけです。そういう意味では、なかなか内部の人と深く、喧々諤々の議論も含めていろいろ話してみないと分からないのですが、イデオロギーとは真逆のプラグマティズムをすごく私は感じました。

このコンテキストで、この『シリア獄中獄外』を読んでいただくとよく分かるんです。特に二〇〇七年ぐらいまでの汎アラブ紙に書かれた論考ですね。当時、汎アラブ紙がシリア国内で広く読まれる時代になりましたので、一九八〇年代とは言論状況も異なっていました。シリアの国家上層部の中にも、過去は過去としてやはり反省したい、水に流したいと考える方もそれなりにいたようです。そういう状況の中で、国民和解への意志について、シリアの作家たちも日常のコミュニケーションの中でさまざまな形で感じていたのだと思うので、やはりその意識に訴える論考であったのだと思います。

先ほど挙げました「パルミラへの道」というのも、同じテーマだと考えます。第一章の「年月と場所の面持ち」も読んでいただくと分かりますけれども、日々の生活の中では、看守というのは必ずしも抑圧の存在

だけではなくて、一緒にトランプで遊んだりする仲間であったりもします。しかし同時に、もしその看守も、もっと上から命令を受ければ暴力も辞さない、国家権力を体現した存在です。ある種の二重の存在です。ただ、出獄した後、その暴力を振るった看守が実は後々後悔していたみたいなことを人づてに聞くといった、いろんなリアリティがあるわけです。そういう中で、二〇〇〇年代になると、無数の経験を含めて、同じシリア人としてやり直していきたいという意志を、「抑圧された側」から「抑圧した側」に語りかけるのです。もちろん、国家や治安機関の最上層部というのは、全く聞く耳は持たないんでしょうけれども、体制全体を構成しているそれなりの数の人間が変わっていけば、また国家も変わらなければならないという認識や意識が共有されていたということです。

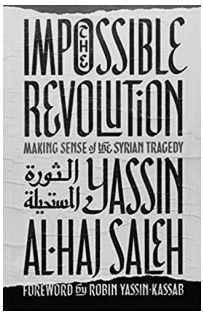
ところがだんだん雲行きが怪しくなってくるのが二〇〇〇年代後半でして、「監獄知識人」から「知識人の監獄」という問題に変わっていくわけです。監獄知識人というのは、若い頃に収監されて、その後たくさん本を読んで、いろんな議論をして、出獄したらジャーナリストとか作家とかになっていったという人たちのことです。しかし、二〇〇〇年代半ばぐらいからミッシェル・キーローさん[17]とか、長らく有識者として知られる方が、数カ月から数年にわたって再び収監されます。「知識人の監獄」っていうのは、イタリアのグラムシや、ソ連、それから旧共産圏の知識人に多々あった例です。そういう意味では「監獄の知識人」から「知識人の監獄」に変わる、すなわち他の権威主義国家でしばしば起こるような形で一般化してしまったということです。加えてサーレハさん自身も一九九六年に釈放されて十年たつと、それまでは監獄に郷愁を

17　ミッシェル・キーロー（一九四〇年〜）シリア代表的な反体制派作家、政治活動家のひとり。二〇〇〇年代には市民社会の構築と政治改革を要請する有識者の運動において中心的な役割を果たした。

感じていたにもかかわらず、だんだんそれも冷めてきたということです。

それから、この本ではわずかにしか扱ってないですけれども、二〇〇〇年代におけるシリアのイスラーム主義者は比較的若い人で構成され、いずれアルカーイダ系組織とか、ISのメンバーになるような方のプロトタイプ（原型）であったと示唆されています。こうした問題は当時からあったのですが、若きイスラーム主義者は、やはりシリアの、かなり手の込んだ、手だれの治安機関に、都合よく利用されていたという状況もありました。要するに、アサド政権が過激なイスラーム主義者に対処できる「防波堤」であるというイメージを国際的に広めるために、大いに利用できる存在であったのです。その一方でサーレハさんは、イスラーム主義者であっても祖国の一員であり、同じ国を作っていく仲間である以上、収監の経験をみんなに理解される、共感される形で書き残してほしいと訴えます。つまり迫害のイデオロギー的な物語ではなくて、個性のある一人一人の顔の見える物語をぜひ書いてほしいということも、この『シリア獄中獄外』の中で強調されているのです。

あとは、サーレハさんが『不可能な革命――シリアにおける革命、市民の戦争、みなの戦争』（二〇一七年、英訳あり）で論じられていることですが、「新スルタン主義」と呼んでいる究極の縁故主義を体現した権力システムの問題があります。二〇〇〇年代を通して市場開放政策を進める中で、結局アサド一族の権益ネットワークがどんどん肥大化していくのです。たとえば私がシリアを去った二〇〇九年くらいになると、ダマスカス国際空港に乗客を連れて行くことのできるタクシーは、大統領のいとこの資本家ラーミー・マハルーフ系列のタク



『不可能な革命――シリアにおける革命、市民の戦争、みなの戦争』

シー会社の車両とか、ごく少数の資本系列に限定されていきました。私がダマスカスに住み始めた二〇〇三年の頃は、どのタクシーでも空港に行けたのですが、生活のいろんなところで資本の独占化が進行しました。市場を世界に開いていくと同時に資本の独占過程が深まっていって、同時に、そこから排除される人が多数出てくるのです。これがやっぱり二〇一一年以降に民衆蜂起の形として爆発する大きな要因になっていったというふうに思われます。

『シリア獄中獄外』の第九章以降は、二〇一一年以降の考察になります。二〇〇〇年代前半には　体制上層部に訴えかけて、監獄の問題は監獄の問題として、祖国は祖国の問題として、別々に分けて考えようという立場だったのですが、二〇一一年以降は「シリアという国全体がやはり監獄であった」ということが強調されます。祖国を監獄に例えるのは一般的な比喩ではあるのですが、現実的にそうであったと確認されます。さらには「絶対的監獄」といわれるパルミラ刑務所にも例えられ、祖国全体、シリア全体がパルミラ化していると主張されるのです。つまり一人一人が匿名の存在になり、顔も見えず、犠牲者となったとしても世界に忘れられるということです。一九八二年にハマの大虐殺[18]で経験したことがシリア全体で起こっているというのです。アメリカ含め国際社会も結局は、イラク戦争以後の混乱もあって、そんなにシリア情勢に首を突っ込みたくないというのは、日々のニュースとか、分析をみれば明らかでした。そういう現実の中で、ロシアとイランが、アサド政権を支援すべく、大量の武器だけでなく自国の兵士をも送って後ろ盾となり、殺戮と混乱が続いたのです。

18　一九八二年、シリア中央部のハマ市でムスリム同胞団の武闘派が決起したのを受けて、アサド政権が街ごと破壊し、一般市民を含めて虐殺に及んだ事件。

イスラーム主義者に関連して言えば、ＩＳとは何かという主題を扱ったサーレハさんの最近の著書を紹介させてください。ジグムント・バウマン[19]の『リキッド・モダニティ』という有名な著書がありますけども、そういう議論を借りながら、『抑圧された者たちの帝国主義』という著書を出版しました。帝国主義と言ってもアメリカとか、イギリスとか、フランスの古典的な帝国主義ではなくて、それがある種、模倣され、さまざまなレベルに液状化して、ノマド的に拡散し、一つのネットワークを形成している、それが現在のイスラーム主義者の形であるという分析です。

さて話を戻して、サーレハさんの主張として何が目指されていたのかについて再度触れたいと思います。サーレハさんも言っていますが、シリアの分析を行う際に、日本とかドイツっていうのはあまり参考にならない。日本やドイツはシリアと比べて近代国家に突入する時期はもっと早いですし、国民国家の成熟度も違います。ですので、一九四五年以降に独立した国とシリアを比べていきたいっていうのが、サーレハさんの研究アプローチです。そのような国は多々ありますが、ちょうど先日（七月三〇日）に李登輝さんが亡くなった、台湾と比べることも可能と思います。一九四七年に国民党政府による大弾圧（二・二八事件）[20]がありましたが、李登輝さんが蒋介石の息子に抜てきされて、どんどん活躍していったのが一九七〇年代でした。李登輝さん自身はもちろん二・二八事件には反対する立場だったという記事を読みましたけれども、やはり世代が一つ変わると、国全体として次の一歩を踏み出しているのは確かです。

韓国の光州事件（一九八〇年）[21]をめぐっても、たとえば最近、『タクシー運転手――約束は海を越えて』（チャン・フン監督、二〇一七年）という映画がありましたが、こうした事件も二十年、三十年経ってくると、もはや過去の問題として扱われ、映画化されています。この映画では、一九八〇年当時に光州に入っていって世界に弾圧の現場を映像で伝えたドイツのジャーナリストが主人公として描かれますが、このジャー

ナリストは二〇〇三年には韓国で表彰されているということです。

ところが、シリアの場合は全然そうはいかなくて、まさに同じ時期のハマの大虐殺に関しては、アサド政権の完全な統制下に置かれ報道不可能であったし、もちろん外国人ジャーナリストが入ることは無理でした。[22] シリアの場合は韓国と比べて犠牲者も二桁違い、多くて四万人の方が犠牲となったとされていますし、本当のところはよく分からないんですね。

さらに、シリアを語る国際的なジャーナリストで一番有名な方っていうと、一昔前にアサドの出世物語を書いたパトリック・シールさん[23]がいました。ある意味アサド政権にとっては非常に都合の良い、ありがたい方が、実は国際的に活躍するという状況です。これもすごく難しいところで、「イスラエルに対抗するシリアの国家としての立場」といった主題や枠組みだと、シールさんは本当に素晴らしい論考を書くので、二週間に一回ぐらいは汎アラブ紙『ハヤート』に寄稿していました。しかし、こういう形でいろんな要素が重なって、アサド政権の永続化に政治的だけでなく文化的、言論的にも寄与していくという問題があります。

最後に、「悔恨共同体」の意味を再度考えたいと思います。第二章の「パルミラの道」と第一一章の「政治

19 ジグムント・バウマン→注8

20 二・二八事件　一九四七年二月二八日に台湾で発生した中国国民党支配に対する本省人（台湾人）の蜂起。蒋介石が大陸から援軍を派遣して弾圧。李登輝政権下で真相解明が進んだ。

21 光州事件　一九八〇年五月に韓国の光州市で市民・学生の抗議行動を全斗煥軍事政権が弾圧した事件。

22 政府軍側に従軍してハマに初めて入った外国人特派員はロバート・フィスクで、一九八二年二月一九日付のタイムズ（The Times）紙で現地の様子を伝えている。なお『シリア獄中獄外』の日本語版序文では、フィスクが二〇一一年に政府側の管理の下でシリア国内の刑務所を訪れ、政府側のシナリオに沿った情報を国際社会に広めていると、サーレハは批判している。

23 パトリック・シール（一九三〇～二〇一四年）　英国の中東専門ジャーナリスト。代表作に『アサド―中東の謀略戦』佐藤紀久夫訳、時事通信、一九九三年。

としてのパルミラ」で論じられているテーマです。「悔恨共同体」は日本ではすごく有名な議論です。戦後民主主義を担った日本の思想家は丸山眞男であれ、加藤周一であれ、久野収であれ、いろいろいらっしゃいますけど、戦時中のファシズムを阻止できなかったことへの後悔というのが彼らの間に共有されて、その忸怩たる思いが一つの「知的共同体」を構成したという主張です。とはいえ、これは実際には知識人に限った話ではなくて、先の大戦の犠牲者を悼み、なぜこういう方向に行ったのかを深く反省するということが多くの人々に共有されています。広島の原爆慰霊碑の下には、犠牲者全員の氏名が書かれた名簿がありますが、一人一人の面持ちなり、氏名なりを再度確認し、忘れないようにするということは日本でも、アウシュビッツでも、世界の至るところで多々ある。

ところが、アラビア語で「悔恨」は「タウバ」と言いまして、いろんな報道をみると、アサド政権の手先やイスラーム主義者も使っている言葉です。ところが彼らが使うと、「俺たちに従わなかったことを後悔しろ」みたいな、全然違うコンテキストになってしまうんです。ですが、サーレハさんが訴えたかったことというのは、一番分かりやすくいえば、パルミラ刑務所をパリのバスティーユにしたいということなんです。バスティーユ監獄というのは、現在では真ん中に大きな塔が建てられた「バスティーユ広場」になっております。これは、二〇一二年五月にたまたまオランドがフランス大統領選挙で勝ったときに私が撮った写真です。社会党が勝利したので、バスティーユにこれだけ人が集まって、なぜだか知らないですけど、どさくさに紛れてエジプトの旗とか、

バスティーユ広場

アルジェリアの旗とか、シリアの革命旗とかも揚がっていました（笑）。

ということで、サーレハさんのこの主張は、決してシリアに限った話ではないが、過去にあったことはあったこととして、しかし新しい一歩を踏み出したいということでした。少なくとも、体制の内側で過去に過ちを犯したと思っている人がいるのであれば、共に新しい国をもう一回立て直していこうじゃないかと言いたいわけです。実はそういうメッセージっていうのが、私はこの『シリア獄中獄外』の一番のポイントだと思ったので、訳者解説の最後の部分で、強調してまとめさせていただきました。

2－2　コメント1

鵜飼　哲（一橋大学名誉教授）

この本を頂いて、とても感銘を受けながら読ませていただきました。

先ほど岡崎さんは、徐勝さんの『獄中十九年』を一つの指標として見せてくださいました。私は一九五五年の生まれで、今日の参加者の中では比較的年長かもしれません。『シリア獄中獄外』の作者であるヤシーンさんは一九六一年のお生まれということで、私よりお若いんですけれども、お兄さんのムスタファ氏が一九八五年に三〇歳で収監されたという記述があって、このお兄さんと私はほぼ同年の生まれだろうと思います。その意味で、同世代の人々の経験ということで、もちろん、シリアと日本では非常に条件が違うわけですが、にもかかわらず、世俗的な左派の活動家であったヤシーンさんと私の間には、いくつか共通点もあるなと感じ、それ

も一つ手がかりにして読んでいきました。先ほども岡崎さんが触れられたように、韓国の光州民主蜂起は一九八〇年の五月ですから、ハマの八二年の虐殺の前の、パルミラ刑務所の中で起きた虐殺事件は、ほぼ同時期だということになります。

徐勝さんの本は私も読みました。京都で送った一九七〇年代の学生時代には町中の電信柱に徐勝、徐俊植の兄弟を救えというポスターが貼られていて、町全体が蛮行を糾弾しているとも見える、そういう時代でもありました。その後、徐勝さんとは何度もお会いする機会があり、その人柄や解放後のお仕事、活動の在り方と『獄中十九年』が、私の記憶の中でいまではかなりブレンドされていて、純粋にこの二つの本を比較するという感じにはならないんですけれども。現在のように韓国が左派政権の時代には特に、徐勝さんのような在日朝鮮人祖国留学生も含めた民主化運動の時期の被弾圧者の方たちが、その時代をどう記憶しているか、そのことを踏まえつつ自分自身をどう認識しているか、また他の人たち、とりわけ若い世代が、それをどう評しているかということは、現代の韓国社会にとって実は非常に重要な要素になっているわけです。

シリアとは違い、朝鮮統一を目指すということを方針に掲げた左派政権が、民主化の結果勝利する、政権を獲得する可能性のある国に韓国の場合はなったということだと思います。もちろん、現在の日本とはなかなか比較になりませんけれども、まず、獄中経験ということでいうと、日本では戦前の共産主義者、非転向組がいました。徳田球一は獄中十八年、宮本顕治は十二年、この獄中で転向しなかったという神話が、戦後の前衛党としての共産党に対する一種の信仰を生み出した。五〇年代半ば、六全協[24]の後ということになりますけれども、この神話を問い直すことで思想としての日本の新左翼運動が形成されていく。ずっと後に、しかしその潮流の中で、私は自己形成していったわけですが、戦前よりも五〇年代から七〇年代の日本における反体制運動の弾圧、その中での政治経験と思想形成の営みと、この本の内容はむしろ比較できるんじゃ

ないかと考えながら読ませていただきました。

最初のほうで私がびっくりしたのは、獄中で政治犯がお料理をしているところです。日本や他の国の弾圧の事例も、かなりいろいろなドキュメントを読んできた経験からすると、これはなかなか衝撃でした。収監そのものが、何かしたから捕まったというわけではなくて、獄中生活を強いられている人たちはほとんど思想犯なのですが、この逮捕・収監の恣意性と獄中の相対的自由、日常の暴力性と看守の人格の多様性が裏表の形で存在してきたのかなという気もしています。同時代の日本の政治犯の獄中生活が細かいところまで非常に厳しい制約があったことと比べると、大ざっぱというのか、ある面で緩いところもこの時代のシリアにはあったのかどうか。

日本では連合赤軍とか反日武装戦線の政治犯[25]の死刑囚で獄中死した人がいますし、懲役刑では刑期が二十年を超えた人も何人かはいます。日本ではこのこと自体、思想化されていませんし、その後の日本社会との関連でどう論じれば意味を持ちうるのかということもなかなか糸口がつかめません。しかし地道な作業は一方で持続的に行われてきているということは最初にちょっと確認しておきたいと思います。

五章から九章の監獄知識人の生成過程ですが、いま岡崎さんは二〇一一年以降の事態に視点を置いて、「監獄への郷愁」が失われたところに重要なターニングポイントがあったと指摘されましたが、まさにそのとおりだと思います。ただ、日本の一般的な、私も含めた読者からすると、「監獄への郷愁」ということ自体、ある意味、耳慣れないというか、どういうことなのか。実際にインタビュアーの女性もそのことを詳しく

24　一九五五年七月に開かれた日本共産党第六回全国協議会の略。武装闘争路線を自己批判し、党の統一を回復して公然活動に転換する画期になったとされる。

25　連合赤軍、東アジア反日武装戦線はそれぞれ一九七〇年代に武装闘争路線を掲げた左翼系政治組織。

尋ねているように、ヤシーンさんが証言し自己分析された作業の中で、とても重要なのはこのことかなと思っています。

ヤシーンさんは共産主義者であったわけで、シリア共産党の中で、私の理解したところでは、ある時期以降、体制に加担する選択をした潮流と、そこで分岐して反体制活動を続けた潮流があり、さらにこの後者が二派に分裂する中で、サーレハさんが学生時代に身を置いたグループが弾圧を受けたということでしょうか。その中で英雄的に抵抗し、まさに獄中十何年、非転向ということが政治的に有害な紋切り型を形成しているということに、だんだんと気付いていかれるわけですね。この紋切り型を壊していく、非常に優れた知的な意志の強さがとても印象的でした。また、出獄後の政治犯について、ピエール・ブルデューの「象徴資本」[26]という概念が使われています。これは理論的には知られていることですが、現実の歴史過程の分析にこのように適用できるということに、本当に目が覚めるような思いをしました。

獄中での読書の効用というところも、非常に古典的な深さを備えていて、大変感銘を受けたところですが、獄中で外国語の学習も含めた知的な「原始的蓄積」が行われ、そこで獲得した「象徴資本」を釈放後に活用する。ただ、そのことが、まさに象徴的な意味で左派の政治的知識人の「ブルジョア化」を生むという批判などは、今までこういう形で主張されたことはあまりなかったのではないかと思います。サーレハさんはアラブ世界の外部に視野を拡張することは絶対に必要だと考えておられる一方、西洋志向に対する自己抑止は非常に確固たるものがあります。現在はベルリンにおられるということですが、西洋に引きつけられる傾向にできるかぎり抵抗していった過程も、本書のなかに辿ることができます。

私はフランス文学が専門で、獄中で誕生した作家の系譜ということにも関心を持ってきました。先ほどバスティーユに言及されましたが、例えばサド侯爵[27]がやはりバスティーユにいたわけですね、革命のときに。

二〇世紀になるとジャン・ジュネ[28]のような人が獄中から文学活動をしていく。あるいは彼も支援をしたアメリカの六〇年代の黒人公民権運動の、左派のブラックパンサーの一人であったジョージ・ジャクソン[29]は獄中で革命家になっていく。そういう系譜があったわけですが、その時代、あるいは徐勝さんの十九年の獄中生活の時代と、サーレハさんの場合が決定的に違うのは、八九年から九〇年のソ連・東欧社会主義圏の崩壊を獄中で迎えたということでしょう。

「監獄への郷愁」というのは監獄が自宅以上に「家」になっていくことですが、この点について実にさまざまな角度からの分析が見られ、一種、胎内回帰的側面も指摘されています。獄外ではすべて自分で決めなければいけないのだけれども、獄中でほとんど自由がないということが逆にもう一つの解放のモメントにもなり得るという、これは経験したことがなければなかなか信じることができないという意味で、まず証言されるべき思想だと思います。ジャン・ジュネは少年院から出てすぐ軍隊に入り、一九二八年、二九年のフランスによるシリア反乱鎮圧[30]作戦に動員されています。廃虚のダマスカスで初めて自由の味を知る、そういう経験を一八歳でしていたわけですから、もしかするとサーレハさんもシリアと縁の深いジュネに関心を

26　象徴資本　フランスの社会学者ピエール・ブルデューの用語。威信や名誉など象徴的なレベルで働く資本。

27　マルキ・ド・サド（一七四〇～一八一四年）　サディズムという言葉の由来となったフランスの貴族・作家。多くの作品は獄中で書かれた。

28　ジャン・ジュネ（一九一〇～一九八六年）　フランスの作家。獄中で小説を書き始め、恩赦を受ける。晩年はパレスチナ解放運動や黒人解放闘争に関わった。

29　ジョージ・ジャクソン（一九四一～一九七一年）　アメリカの急進的な黒人解放組織ブラックパンサー党に獄中から参加、指導者の一人となる。脱獄を図って射殺された。

30　シリア反乱　一九二五～二七年にフランス委任統治領だったシリア・レバノンでフランス支配に対する反乱が広範囲に広がると、フランスは軍を派遣して徹底的に鎮圧した。

持ったことがあるかもしれない。

またこの著作で深く感銘を受け、いろいろ考えさせられたのが、一七六ページから一八二ページに述べられている、獄中でラマダーンのときに断食をするようになったというエピソードです。世俗主義であったサーレハさんがなぜ断食をするようになったか。非常に多義的な意味づけがあるわけですね。まずお母さんからの呼び掛けがあった。しかし、そこから自分のルーツや、断食の意義を発見していく過程があり、それが同時にたくさんのもの、共産党の政治路線等々からの自立につながっていく。自立という言葉が、私は一つのキーワードだと思いました。

また同時代的なこととして、アブドゥッラー・アルウィー[31]とかサミール・アミーン[32]など、私が獄外で読んでいた本と、ヤシーンさんが獄中で読んでいた本とが、部分的に重なっているというようなことも一つ理解の回路になりました。ただ、これは多くの方が疑問に思われるかと思いますが、書籍に対する検閲は、この時代のシリアの監獄ではどうなっていたのでしょうか。少なくともイスラーム主義者に対しては確実にあったと思うのですけど、この本の中でそれについての言及はなかった。

それから、日本でもこの問題は非常に深刻に論じられてきましたけれども、この時代の監獄批判は、一般刑事囚の解放運動に、いわば寄り添って進んできていたわけですね。シリアの世俗主義左派の収監者にとって自己の状況を映す鏡は一般刑事囚ではなく、圧倒的な大きさでイスラーム主義者であったということは理解できますが、それでは一般刑事囚とどういう出会いがあったのか、なかったのかという点はどう考えたらいいのか。監獄の構造とか管理政策、政治犯の数の増加に伴って、一般刑事囚との空間的分離が行われたのか。この辺り、もし岡崎さんがご存じのことがあったら教えていただきたいと思います。また、二〇〇一年の九・一一に関しては、本書中には言及がなかったようですので、この点についてもご存じのことがあれば

教えていただきたいと思います。

二〇一一年以降、著者はできる限りシリアに留まろうとされるわけですけれども、それが挫折し、お連れ合いが拉致、行方不明というなかで亡命、難民化し、トルコを経て現在ドイツにおられるということです。お連れ合いも八〇年代、九〇年代に獄中生活を経験している女性活動家であり、いわばその歴史を体現する存在である人がシリア革命に参加したということの歴史的意義に触れられていました。ここも大変心を打たれました。ここでの比較の対象はどちらかというとパレスチナだったような気がします。それでは他のアラブ諸国、チュニジア、エジプト、リビア等で起きたことをヤシーンさんはどう見ておられるのか。そこに必然的に関心を誘われます。

最後にイスラーム主義者がもし獄中で外国語を学び、自分と同じような経験をしたら、どういう思想変容があり得るのだろうかと想像するところが印象的でした。世俗主義に対する批判も現在はされているということですが、エジプト、あるいはチュニジアで起きた事態などを見ても、世俗主義とイスラーム主義両者の関係が、アラブの一連の民主化運動の鍵になっていることは間違いありません。世俗主義者から自己批判の文化が出てくるということは、ある意味われわれにとっても理解できる筋があるわけですけれども、イスラーム主義の運動に関わった人々の中からどのように自己批判の文化が形成されるか。このことが今後のシリア、ひいてはアラブ世界の将来の政治構想にとって非常に重要だと思います。

31　アブドゥッラー・アルウィー（一九三三年〜）　モロッコの思想家、歴史家。アラブ世界における国家や自由の概念史研究などでも知られる。

32　サミール・アミーン（一九三一〜二〇一八年）　エジプト出身のマルクス主義経済学者。日本ではサミール・アミンとも訳される。『不均等発展――周辺資本主義の社会構成体に関する試論』西川潤訳、東洋経済新報社、一九八三年ほか邦訳多数。

少なくとも、本書から、その思想面での具体的可能性が垣間見えるのではないかということで、ちょっと長くなってしまいましたけれども、以上でコメントを終わらせていただきます。

2－3　コメント2　酒井　啓子（千葉大学教授）

今日は皆さん、たくさんお集まりいただきましてありがとうございました。岡崎さんの訳書のブック・ローンチをやろうと言い出したのは私でありまして、というのも、元々このウェビナーの連載を新学術領域の企画としてやろうというふうに考えていたのですが、コロナ禍でこもっていなければいけなくなった。こもっているっていうことは、ある意味では監獄にいるようなもので、監獄にいると自由が利かない。ですが、自由が利かないときこそ、頭を働かせて、いろんなことを考えて、そこから知識人になっていくというのが中東だとよくある話なものですから、そういうことで、コロナ禍であれ監獄のなかであれ、こもっている人は、実は新しいことを学ぶのにはとてもいい機会に恵まれているんだという、一つの例にもなるかと思いまして。皮肉な例ではありますが、ぜひ監獄の知識人を取り上げたいなと思っていました。

この本の、一番面白いなと私が思ったところというのは、やはり獄中の話だけで終わってないっていうことです。獄中でこうだった、ああだったって話は結局のところ、シリアだの、イラクだの中東では独裁政権

がひどくて、とんでもない目にみんなあうんだねっていうことが分かるだけ、という、そんな「他人事」として受け止められがちな話だけだと、ちょっとつまらないですよね。でもこの本は違う。むしろ私自身、関心があるのは、獄中の経験をした人たちが獄外に出たときにどうなのかっていうところで、この本でもかなりの部分、そこに紙面を割いて書かれているわけですけれども、そのひとつが、獄中で学ぶっていうことです。先ほど、鵜飼さんも説明されておられましたけれども、獄中で知識人が育っていく。監獄で本がなぜ手に入ったかについては私も聞きたいところではありますけれども、ただ、これはシリアや、あるいはサッダーム・フセイン政権下のイラクに限ったことでは決してなくて、監獄の中で学び、将来の思想や思考方法が固まっていくということは、パレスチナなんかでよくみられる、典型的な話だと思います。

パレスチナでは、例えば、インティファーダでイスラエル兵を攻撃して、それで一泊でも二泊でも投獄されることが、ある意味では箔をつけるというか、まさに子どもが大人に成長する第一歩として捉えられるという例が指摘されている。占領下、抑圧下にあるということは、本当にそういう社会になっているっていうことなんだと思います。ちなみに、読んでいて印象に残ったのは、シリアでムスリム同胞団は、そこにメンバーとして所属するだけで逮捕されるっていう、そういう世界でもまれな、ひどい仕打ちをされる対象にイスラーム主義組織がなっている、シリアのバアス党政権はそういう弾圧をするんだっていうくだりです。実はこれ、フセイン政権時代のイラクで同じことをダアワ党が言ってたんですね。

ダアワ党はシーア派で、ムスリム同胞団はスンナ派だという点は違うんですけども、同じくイスラーム主義組織であるダアワ党は、サッダーム・フセイン政権のもとで、所属するだけで死刑判決を受けた、そういう弾圧を受けていたっていうことです。私は九〇年代にダアワ党の当時の亡命党員と話をしていたときに、それほどに弾圧されていたんだ、っていうことを自慢げに言っている姿が、とても印象的でした。それだけ

獄中で頑張ったんだ。あるいは、それに耐えてまでもダアワ党に所属する、あるいは、反体制を貫くんだっていうところが一つのプライドになっている。そのプライドが、その後どうなるのかっていうのが、興味があるところなんですね。

投獄の体験が、体験者にとって獄外でどういう意味を持つのかっていうところで、いろんな思いを抱えて、まさにマージナルな場所、獄外と獄中の間で、大変いろいろな思いをするっていうのが、このサーレハさんの本の多くの記述にあるわけです。たとえば「多くの者が降参し、自分を捨て、歪曲された忘却に身をゆだね、過去の業苦と屈辱をたんなる思い出としてごまかそうとしている」と指摘している。単に思い出としてごまかすというような形で処理する場合もあれば、自然に癒えるまで放置するか、生々しい憎悪を煮えたぎらせているっていう、そういういろんな投獄体験をもてあます姿が描かれています。

ここで指摘したいのは、獄中経験者が、時を経て政権を取る場合があるということで、その例としてイラクが挙げられるわけなんですね。イラクっていうのは二〇〇三年に、ご存じのようにサッダーム・フセイン政権が倒れて、基本的に先ほど申し上げたダアワ党などの、亡命していた政治家たちが中心となって、アメリカのバックアップを受けて政権を取った。そこで政権の中枢に立った人たち、あるいは政党とみなされた人たちっていうのが、まさにこの投獄中に、生々しい憎悪を煮えたぎらせてきた人たちになるわけです。たとえば、イラク南部ではいまでもまだ、「今日からバアス党は存在しない」という看板を掲げている、という事実があります。これは、サッダーム・フセイン政権時代の一九九一年に全国暴動が起きたときに、軍が「明日からはシーア派はない」というスローガンを掲げて暴動の中心にいたシーア派を鎮圧した、ということに由来するスローガンです。No Shia After Today っていうバアス党政権から投げかけられたスローガンに対して、政権がひっくり返った後、南部のシーア派の人たちが、No Baath After Today って言い返すと

いう、要するに報復です。生々しい憎悪を煮えたぎらせて報復におもむくっていうことなわけです。

そこまでいかなくても、元亡命者が政権を取ったときには、自分たちが監獄にいたことを正当化する政権になるわけです。監獄にいたことが報われるんだという。イラクの映画に『バビロンの陽光』（モハメド・アルダラジー監督、二〇一一年）というのがあるのですが、これはクルドの人たちが、自分たちの家族が集団墓地に埋められているんではないかと、各地の集団墓地が発見されるたびに訪ねていくという映画です。その中で主人公のクルド人の女性と孫は、人を頼らない。同じように自分たちは前の政権で弾圧されたんだよっていうようなサポーターとかも出てくるんですけれども、なかなか心を開かない。「私たち」じゃなくて、とにかく「私」が名誉回復されるべきなんだという、そういう感情が表れているんだと思います。こうした意識が、投獄体験がある人たちの間で競われるわけです。私は二〇〇三年以降の体制を、これは犠牲者間の競争体制であると言っていますけれども、いかに独裁政権の下で弾圧されたかを競い合うことによって、自分が最も報われるべきだということを主張する体制になっている。

正直、サーレハさんが求めた投獄体験者の学びというのは、こうではないはずなんですけれども、実際に、獄中の人が獄外に出て、政権側のポジションに立ったイラクっていうのが、そうなっているっていう現実がある。今後シリアでもそういうことがありうるんじゃないかということを、頭の隅に入れていただければなと思います。

続きまして、本書には、「元収監者が直面するのは新生活の、自由の困難さ」「収監者はほとんど使う機会がないという理由により意志や決定を担う器官を衰弱させる」「自分で決めるという力が萎える」「方向を見失い、自分ひとりで立つことはできない。そして監獄への郷愁に身を委ねはじめる」とあります。結局、監獄への郷愁に身をゆだねるとか、方向を見失うとか、いろいろ悩み多き獄中体験者たちのことを表している

のだろうと思いますが、これについて、今、イラクで何が起こっているかということを考えてみたい。サーレハさんの結論は、最良の囚人、自らの行動を通して監獄的かつ国民的な団結の模範を具現している者になっていくのが、監獄の正しい学び方なんだっていうことなんだと思います。それを提唱しておられるわけです。

サーレハさんの本の中では、監獄の物語や体験談をイデオロギーや神話から脱却させなければいけない、こうしたイデオロギーから脱却すれば、より根源的、一般的、民主的な形で、もう一つの勇敢な行為を救い出すことになる、獄中経験者だからこそ見いだせる何かがあるはずだ、というふうに主張されているわけですね。ところが、今、イラクで何が起こっているかっていうところで、昨年の秋から起こっている民衆蜂起のことを取り上げてみたい。二〇一九年一〇月から、広範な反政府民衆蜂起が起きているんですけれども、ここでとても私が面白いなと思うのは、世代間の差なんです。この蜂起の源泉になっている人たちは、かつて投獄経験があったり、それを学んで知識人化した人たちでは全くないわけです。そういったところとは全く無縁な、二〇〇三年に新しく政権ができてからの生活しか知らないような超若い人たちが暴動を起こしている。二十代、三十代、あるいは十代もいるのですけれども、そういった今の政権しか知らない、投獄も知らない、今の政権が暴力を振るうことしか知らない、前政権の投獄

2019年10月から続くイラク民衆蜂起

体験なんて知ったことかいっていうような世代が、自由に、奔放に、反旗を翻している。この自由さっていうのは、一体、どこからくるのか。

決して、前政権の獄中体験者の人たちの経験や学びというものが、全く引き継がれてないということが言いたいのではないんですけれども、一体、どう引き継ぐのか、なんですね。「最良の囚人、監獄の真の英雄はみずからの行動を通して〈監獄的かつ国民的な団結〉の模範を具現化している者」。そういった者たちが新たな世代に何を伝え、残せるか。これが多分、まさに今のイラクの共産党が抱えている問題です。イラクの共産党も、この二〇一九年の蜂起に関わろうとして、いろいろアドバイスしようとしているんですけれども、どうしても世代間の違いというか、うまくいかないところがあるように見える。こういった新しい流れっていうのは、どういうふうにつないでいくことができるんだろうかっていうことが、私の個人的な興味です。

また、サーレハさんは繰り返し、中にいることが重要なんだと、シリアの内部にいながら国の改革に取り組んでいるっていうことが重要なんだということを指摘しておられます。それから、サーレハさんがいろんなところで評価を得ているのは、国内にとどまっているという点なんだともおっしゃってます。でも、最後に結局、難民という形で国外に出ざるを得なくなった。そこで改めて、これまで国内において、シリア国民として、シリアの圧政からどう自立するかっていうことをもっぱら考えてきたけれども、そうではなくなってしまう。結局、世界そのものがシリアを自立させないというような、そういう国際的なシステムの中に入り込んでいることが問題なんだと、視野を広げることになる。

その中で例えばサーレハさんは、「避難所と物理的支援は与えられても、大義を掲げた自由な個人や政治活動家としては認められない。このシステムは難民から自由や政治的なアイデンティティをはく奪する。身

の安全となけなしの生活支援と引き換えに、大義のための行動を制限する」「欧州の難民受け入れシステムはシリア人の人生をより厳しいものとした」というふうに言っている。シリア人が難民化したときに忘れ去られてしまう、ある意味では人間の尊厳を剝奪されたようなシステムが国外にある、ということに気が付き、そこへと批判の目が向けられるようになります。国外にも監獄があるっていう、そういうような指摘が、私は個人的に非常に重要だなと思っているんですね。

そこで、どうしても言いたかったことが二つあります。日本もそうですし、国際社会一般にそうなので、しょうがないことなんだろうとは思うのですが、難民を取り上げる、難民問題をアピールするというときに、例えば、国内にいる難民の人たちがやっているレストランを訪れてみましょうとか、難民を、難民の社会を理解するためにシリア料理を食べましょうとか、ミャンマー料理を食べましょうってキャンペーンがとても多いですよね。それって、すごい矮小化のような気がする。

要するに、私が言いたいのは、世の中の言説がみんな「救済しなければならない可哀そうな難民」になってしまっていて、だから、「彼らの作る料理を食べて理解してあげましょう」と。その一方で、かつてあった政治的亡命者としてそうした人々の話を聞く、というような発想がないんです。「亡命者」という語りは、一体どこにいったんだろうと。日本には少なくともゼロです。日本で政治的亡命者として生きる道というのはほぼないわけですね。だけれども、例えば、フランスにしてもイギリスにしても、ヨーロッパには政治的亡命者として生きていく道っていうのがあるわけです。彼らはレストランの経営なんてしなくてもいいんです。政治的な亡命者としてやっていく道がある。それはそれなりに知識人としての尊厳を維持できるものなんだと思います。ただ、そこにも落とし穴というかジレンマがあって、本の中にも出てきますけれども、こうした政治的亡命者は、反体制派のスタンスを保って在外から発信していくようになる。たとえば、大手の

汎アラブ・メディアで政治的コメンテーターになるとか。

実は、このウェビナーが始まる前に調べてみて愕然としたんですけれども、有名な汎アラブ新聞に、『ハヤート』という、アラブ人知識人がこぞって論壇を載せるというインテリ向けの新聞があったんですが、それがこの三月に廃刊になっていました。それを知って、ちょっと私は衝撃を受けたのですが、なぜかというと、かつて九〇年代に、サッダーム・フセインから逃れて海外に亡命していったイラク人知識人たちの多くが、この『ハヤート』紙に寄稿することを至上の目標にしていたんです。彼らは、何とかこの新聞に論考を書くんだ、そのためにはどんなに貧しくても、かつかつの原稿料で頑張ってやっていくんだ、っていう決意を持っていたようなところがある。汎アラブ紙ではあるのですが『ハヤート』ってサウジアラビアが資本を出しているわけで、つまるところ、欧米と湾岸資本のロジックに乗っかった論をいかに立てていくか、そういう知識人にいかになるかっていうことで、自分を売っていかなきゃいけない。亡命知識人がそういう問題を抱えていたっていうことは、ちらちらとこの本の中にも出てきているんですけれども、取り上げてみたいと思いました。

最後のコメントです。サーレハさんの本の中で「忘却」ということがとてもたくさん出てきます。「体制はあらゆる力を用いて記憶を消し去ろうとしている」のみならず「世界の記憶の仕組みにおいて大きな欠陥がある」「世界には忘れ去られた者が溢れており、言及と記憶から排除された砂漠があるということ」といった指摘があります。監獄というのは、ある意味では、人の目に触れさせない、その人の存在、その人の思想を監獄の中に押し込めて、一般の人たちからは忘却させるというシステムなわけですね。恐らく難民もそうです。難民として押し込める。それが政治的亡命者ではなくて、難民であるとなった途端に、レストランの経営者は文句を言うなと、しゃべるなと、そういうおとなしい、話されると困った人たちにされてしま

う。彼らの忘れ去られたくない記憶というのを、サーレハさんのように発信している人はたくさんいるし、岡崎さんのように、それを翻訳して出す人たちはたくさんいる。でも、なかなか届かないわけです。

ここで重要な問題は、われわれは地域研究者と自分たちのことを自称しているわけですけれども、地域研究者、例えば文化人類学者とか、政治学者もそうですけれども、生きている人たちの言葉や行動をいろいろ語り継いでいく。それを翻訳して、分析して、一般的な形で広げていく。歴史家は死んだ者の言葉を文書の形で読んで、それを広げていくわけですけれども、言葉を翻訳するというのは簡単。あるいは、それを分析するのは簡単。しかし、それをわれわれの、つまり日本人の日常生活の中で、シリアやイラクや中東という遠い世界で起きていることを、どう定着させていくかが問題。「あそこは怖いよね、やっぱり独裁だよね、いっぱい人が死ぬよね」っていうことだけで覚えられるのではない。何かもっと自然にわれわれの生活の中に忘れられないでいられるような仕組みというものを、どうやったら作っていけるんだろうかと。

これは現地の人たちの言葉を拾っている、一番近くにいるわれわれが翻訳すればいいだけの話ではなくて、そこをどう、もっとちゃんと定着させるのかっていうことを考えていかないとならないのではないかと思います。時々、問題が起こったら思い出される、危ない地域に住んでいる人たちの言葉としてしか捉えられないでいることが問題だと思うんですね。それは、実はとても深刻な問題で、政権であれ反体制派であれ、国際社会に自分たちの存在を強烈に覚えておいてほしいと思っている人たちは、そのことをよく知っているので、強烈に覚えられるような行動をとります。ＩＳにしてもそうですし、タリバンにしてもそうですし、パルミラを壊したのは、人の命をいくら殺しても全然意に介さない西洋社会に対して、パルミラの世界遺産を壊せば絶対騒ぐっていう人たち向けに発信したことだと思うんですね。

あるいは、バーミヤンだってそうだと思うんです。人が一〇〇万人死んでも動かない西洋社会を動かすた

めの驚かせ方をやるっていうのは、タリバンにしても、ＩＳにしても、けしからんっていうのは簡単なんですけども、そうしないと驚かない世界って何？　人間の命は忘れて遺産のことばかり気に掛ける世界って何？っていうことを、最後に問い掛けたいと思います。

2－4　ディスカッション

岡崎　お二人からのコメントを受けて、論点は多々あるのですが、かいつまんで答えてみたいと思います。鵜飼先生に言っていただいた「監獄内でなんで料理できるの？」っていう疑問ですけども、これはアラブに住むと「できるんじゃないかな」と思ってしまう経験が多々あるんですね。たとえばレストランでご飯食べていて、ウエーターさんと話が盛り上がって、ウエーターさんに、ちょっと俺のお酒も飲みませんかと誘って、給仕長が見ている横で、ウエーターさんの「ここの給料が安い」という文句を聞くといった経験がありました。近代社会においてわれわれは、いろんな場で演じていくっていうのが一つの前提になっていますけれども、その演じるという前提自体が、アラブ社会では実はあまり根づいてないというか、少なくとも近代社会の規律・訓練（ディシプリン）からの逸脱、そこから生まれる余白は広く見受けられるように思います。そういう意味では、「料理したいんだったら別にいいんじゃないか」と看守が見逃すような緩さというのが、生活のあり方や意識において、いろんな形で表れているように想像します。

書物の持ち込みに関しても、鵜飼さんがかつてお読みになった、サミール・アミーンであれ、アブドゥッラー・アルウィーの著書であれ、基本的に「アサド」とかいったＮＧワードは特に書いてないわけで、一般化された抽象的な議論が展開されています。その意味では、看守とか、刑務所の管理側というのは本の内容

についてはよく分からないのではないかと思います。看守と政治囚の間には学歴の差がありますし、看守の目からみれば、政治囚はどうやら難しい本を読んでいるけど、読みたいなら読めばという感じになるのではないかと思います。こうした傾向は世界各地の政治囚でも似たようなところがあるのではないでしょうか。

ジャン・ジュネですけれども、ジュネは、サーレハさんよりもちょっと年上の方のほうがよく読んだかなという印象をもっています。シリアの思想家でサーディク・ジラール・アズム[33]という方は日本でも東北大で一時的に客員教授をされていたこともありますが、ジュネの『バルコン』[34]といった作品に言及した論考があります。[35]あと演劇ですと、サアダッラー・ワンヌース[36]が一九六〇年代後半にパリにいらしたときに、ジュネの舞台にも影響を受けたという記述もあります。すなわち一九三〇年代から一九四〇年代初頭の生まれの知識人は原文のフランス語で、あるいはアラビア語の翻訳で、ある程度親しんだのではないかと思います。

ところが、サーレハやその世代の作家が、ジャン・ジュネに影響を受けたという感じはしません。そもそもジャン・ジュネは一九七〇年代の経験からパレスチナ問題をめぐって革命主義的な意識を表明したわけですが、サーレハの時代にはパレスチナの革命（イスラエルの撃退）はあまりに非現実的になっていました。むしろ深刻な問題はアラブの独裁政治であったので、ちょっとテーマが変わってしまいました。そういう意味でジュネの作品は、なかなかサーレハ以降の世代にはそれほど読まれていないのではないかという印象です。

それから、一般刑事囚と政治囚の違いに関してですが、やはり政治囚の方々は、「自分たちは泥棒や殺人を犯したわけでもないので、やつらと違う」という意識を強く持っていたと思います。ですから一般刑事囚の解放運動が、特にシリアの中で起こったということはあまり聞いていません。もしくは、大統領の気まぐれで恩赦が出された時に、一般刑事囚のほうが意外とすぐ釈放されてしまうにもかかわらず、政治囚は長々

と獄中に留め置かれるという問題が常にあったのかなとは思います。

あとは、イスラーム主義者のあり方ですね。チュニジアのイスラーム主義政党・ナフダ党のガンヌーシ党首は、一度は握った国家の最高権力を自ら譲りました。やはり市民社会が成熟してきたら、イスラーム主義者も今みたいな形に留まっていないだろうという認識が、シリアの知識人の中にそれなりに共有されていたのだと思います。二〇一二年一一月から二〇一三年四月にかけて、ムアーズ・ハティーブさん[37]がシリア反体制派を束ねる「シリア国民連合」の初代議長となりました。ハティーブさんとは、二〇一一年に民衆蜂起が起こった当初、私の知り合いのキリスト教徒の若い方が直接会ったそうです。運動に関する会合の際に、ハティーブさんが紅茶のグラスを掲げて「カーサック」、すなわち「乾杯」とそのキリスト教徒の若者を含めた仲間たちに言ってくれたそうです。「乾杯」っていうのは、シリアではワインを飲むキリスト教徒の慣習なんですけども、一方ハティーブさんはウマイヤド・モスクの有名なシェイフの家系の方で導師もされていました。すなわちイスラームの宗教的な背景を有する方が、この革命のコンテキストで、キリスト教徒の若者に「乾杯」と言ってくれるわけです。そうなると、「僕はこの人に付いていこう、そういうふうに思った」という話を聞きました。そんな話がごまんとあるのだと思います。

33 サーディク・ジラール・アズム（一九三四〜二〇一六年）　シリアの哲学者。代表作に『敗北後の自己批判』（一九六八）、『宗教思想批判』（一九六九）など。

34 ジャン・ジュネ『女中たち／バルコン』渡辺守章訳、岩波文庫、二〇一〇年。

35 SadiK J. Al-Azm, “The Importance of Being Earnest about Salman Rushudie” In *Islam: Submission and Disobedience*, Gerlach Press, 2014, pp.7-57を参照。

36 サアダッラー・ワンヌース→注13

37 ムアーズ・ハティーブ→注9

「シャームのイスラーム」（イスラーム・シャーム）という言い方があります。シリアはさまざまな宗教・宗派が複雑に入り組んだ社会で共存してきた歴史を有していますが、イスラームの背景を背負った人も、同じ空間で共に生きていく態度を示すことは多々あります。日常の小さいレベルのちょっとした行動でも、「俺はおまえの仲間だ」「同じ共同体の一員だ」ということを態度で示すのです。

ハティーブさんも決して政治家として優れていたわけではありません。イスラーム主義者のドグマである「理想主義」に囚われ、「結局、政権と話し合えば分かるはずだ」という立場を維持しました。しかし、政権側による圧倒的な暴力がまかり通っている二〇一三年の状況で、「さすがにそれは難しいだろう」って突っ込まれて、最終的には辞めざるをえませんでした。しかし、シリアにおいても、さまざまなイスラーム主義者がいまして、話し合える方もごまんといるんだけれども、そういう人たちが目立たないように、大きな力学でねじ曲げられていると思います。

九・一一事件に関するサーレハの言及ですが、彼は最近ではイスラーム主義者が抱えるイデオロギーの研究をしております。九・一一事件はまさにイスラーム主義者によって引き起こされたので、それはこの監獄論ではなくて、最近の彼の著作でいろんな示唆があるのかなと思います。私も全部読んだわけではないのでわからないですが、バウマンに負いつつ「液状化した帝国主義」という概念を使って、九・一一事件とは一体何だったのかということは、サーレハさん自体もちょうど現在研究されている主題だと思います。

酒井先生のコメントも本当にありがとうございました。冒頭に挙げた徐勝さんの『獄中十九年』ですが、一九七九年に朴正熙が暗殺されたときのこんな描写があります。

一〇月二七日朝、運動に出た誰かが、死刑場の向こうの保安課の屋上に半旗が揚がっているのをみつけ

た。所内のスピーカーはいつになくしめやかなクラシック音楽を流し続けた。国家元首級の人物が死んだことを直感した。夕食のとき臨時奉仕員として出ていた民青学連の李康哲氏が視察口にくっつき、小声でいった。「徐兄、看守に気どられないように黙って話だけ聞くんだよ。朴正熙が射たれたんだ」。私は思わず「万歳！」と声を放った。彼は目を剥き、「シーッ！」と叱って足早に立ち去った（一七八―一七九頁）。

この感覚というのは想像するしかないのですが、本当に自分の人生が大きく狂って、いつ殺されるかどうか分からないという恐怖をさんざん味わってきて、その元凶が消え去ったときに胸につかえていた何かが一気に溶け去るという感じでしょうか。「一人の独裁者を除いても社会は根本的に変わるものではないと言われる。しかし、怒りは抑えがたかった……安重根のような義士が出なかったのが不思議だった」と徐勝さんも書いています。サッダーム・フセインが拘束され、処刑されたその瞬間においては、イラクの少なからぬ人々の中にこういうカタルシスが共有され、極端な方向に再び社会が向かうというのは必然なのではないかと思われます。

日本では上映されてないと思いますが、クルド系イラク人映画監督のフナー・サーレムの『道路元標（Kilomètre Zéro）』（二〇〇五年）という作品があります。[38] 舞台はイラン・イラク戦争最中でハラブジャ大虐殺直前の一九八八年頃でありまして、主人公のクルド人兵士とアラブ人ドライバーの付かず離れずの、騙し合いと人間的感情の行き交いの物語です。ネタバレにはなりますが、クライマックスにおいてイラクでい

38　フナー・サーレム（一九六四年〜）　イラク・クルド地方に生まれ。十七歳でイタリアで学業を修めた後にフランスに移り、映画監督となる。代表作に『My Sweet Pepper Land』（二〇一三年）など。

ろいろあった後にヨーロッパに亡命を果たしたクルド人主人公が、二〇〇三年にサッダームの像が引き倒される報道を観ながら感極まっている姿が描かれます。映画全体としては個人としてのクルド人とアラブ人の間の何かしら友情めいたものも描かれていたように思いますが、クルド人が自分の人生を、仲間を、民族を、国の人々をさんざん苦しめた元凶に対してどれほど怒りと恨みをつのらせていたのかというのが、ひしひしと感じ取れました。

とはいえ、先ほど酒井さんがおっしゃったとおり、一世代過ぎ去るとまた意識も変わってくるっていうのが非常にリアルだなと思います。昨年一二月に酒井さんの主催で「緊急ワークショップ『アラブの春』再来?――スーダン、レバノン、そしてイラク」というシンポジウムにコメンテーターとして誘っていただきました。酒井さんの発言に加え、私の発言でもその重要性を確認したのですが、イラク民衆が昨年のデモに参加したときに、「複数のノー」、すなわちNOにSがつく（アラビア語では「ラー」を複数にして「ラーアート」）というスローガンを掲げていたことが印象的でした。すなわちアメリカもノーだし、イランもノーだし、サウジアラビアもノーだし、内部の宗派主義もノーだし、全部ノーという立場を打ち出さざるを得ない。こうした極めて複雑で難しい立場から、どうやって自分たちの自律性や独立性を確保し、運動を進めていけるのか。本当に次の世代は、ある意味、サッダーム時代を過去のものとして引きずってないが故に、新しい未来を新しい論理で切り開こうとしているというのが、イラクがまさに今置かれている状況なんだと思います。酒井さんのお話であれ、日々のニュースであれ、そういう雰囲気を感じ取れます。

あとは難民問題ですね。今シリア難民のほとんどの方は政治亡命者と言ってもいいのではないでしょうか。現在これだけ大量の人々の移住が起こると、難民か政治亡命者かという区別っていうのがつかないという状況だと思います。

最後にどのように忘れるか、あるいは忘却を回避しうるのかという問題ですね。これに関しては、実はシリア人が現在無数の形で実践しているのだと思います。私は二〇一五年末に日本に帰国したのですが、日本でこれだけ毎年シリアの映画が劇場で次々と公開されて、配給会社の方も手ぐすね引いてシリア映画の新作を期待して待っているというようなことを想像できませんでした。やはり文字だけじゃなく、映像も含めた取り組みっていうのが、シリアの人々によって多々なされていると思います。

映像表現は最もインパクトがあるんですけども、日本においてはここ一年ぐらいのあいだに、米国の研究者ウェンディ・パールマンさんの『シリア　震える橋を渡って――人々は語る』[39]、シリア人女性作家サマル・ヤズベクさんの『無の国の門――引き裂かれた祖国シリアへの旅』[40]、そして私が訳した『シリア獄中獄外』が出版されました。ここのところ映像のほうがかなり出過ぎていましたが、もう少し細かく文章でシリアが語られているものを、やっと日本で出せたのかなという感じがしております。やはり映像であれ、文章であれ、いずれの形でも私たちが関わっていけたらなと思っております。

山本　参加者の方々からもご質問をいただいておりまして、私のほうでいくつか選ばせていただきました。一つは、この本を読まれた方の印象として、シリアの元政治囚の中でもサーレハさんというのは、少し変わった存在と周りから見られているように感じられる記述があったんだけれども、シリアの他の知識人とか友人たちから見た、サーレハさんの立ち位置に対する評価ということについて、岡崎さんにお聞きしたいと

39　ウェンディ・パールマン『シリア　震える橋を渡って――人々は語る』安田菜津紀ほか訳、岩波書店、二〇一九年。
40　サマル・ヤズベク『無の国の門――引き裂かれた祖国シリアへの旅』柳谷あゆみ訳、白水社、二〇二〇年。

思います。

それから、政治犯の公判記録のようなものっていうのは残っているのだろうかという質問。例えば、鵜飼さんが言及された徳田球一のような日本の例だと、予防拘禁という形で比較的、自由度もあったというような違いがあったのではないか。それに対してシリアの政治囚の場合の、法的な扱いといったことについて、ご存じのことがあればおうかがいしたい。

それから、この本は二〇一一年以前についての考察の部分が非常に多いわけですけれども、そうした長年にわたるシリアの警察国家といいますか、刑務所国家みたいな状況があって、そこから二〇一一年以降の蜂起と反政府運動というのが続けて起こっていったということについても、この本を読むと非常に考えさせられるわけです。こうしたシリアの二〇一一年以降の運動が、例えば日本では、アメリカなど海外から仕掛けられたもので、現地の人々は巻き込まれただけなんだというような研究者やジャーナリストの声がある。これに対して、著者のサーレハさんはどのようにお考えなのか。また、岡崎さんはどのようにお考えなのか。この三つについて、お答えいただけるでしょうか。

岡崎　変わり者と言えば、そうですね。既存のイデオロギーに染まらないという意味での変わり者でしょうか。先ほど鵜飼さんに指摘していただきました「いかにして自立するかという意識」にも関わると思います。その自覚的な、知的な意思に関して際立っている方かと思います。別の意味でも変わり者でして、サーレハさんはラッカという、いわば田舎の出身なんですよね。私の家に遊びに来てスリッパとか出しても、スリッパなんかいらんとかいって、とにかく、はだしで入ってきます。ニューヨーク・タイムズに寄稿するとか、ル・モンドの一面を飾るという割には、ちょっと素朴というか、ある意味マイペースというか、一緒に

いて、時々、はらはらするような感じの方ですね。

この間、ドイツに行ったときも会ったんですけど、彼が登壇するシンポジウムの一時間前に会ったので「ビールでも飲もう」とか言ってカフェに行きました。講演前に酔っぱらっていて大丈夫かなと思う割には、すごくいい話をされてたり、アナキストな感じのところもあって、ちょっと変わり者といえば変わり者です。とはいえ、やはりシリア人の他の人から見れば、よくぞ大きな欧米のジャーナリズムで、自分たちの声を伝えてくれているという思いはあると思います。そこに、やはりサーレハさんに対する多数のシリア人からの期待が反映されているのではないでしょうか。ある意味、サーレハさんがいなかったら、ル・モンドだって、ガーディアンだって、もしかしたらシリア人の声を取り上げてくれなかったかもしれません。取り上げてもらえるような物の見方というものを、サーレハさんは説得力ある形で書くことができるのです。それに関してはサーレハさんに対して、多くのシリア人の方からものすごく希望を持って見られているという部分はあるかと思います。

公判記録についてですが、そもそもサーレハさんの収監理由が「第一次バアス革命への反抗」でした。一九六三年に政権を奪取したバアス党の目指した目的に反抗したことへの罪ということです。その後、一九六六年に二回目のクーデターがあって、さらに一九七〇年にハーフェズ・アサドがさらに政権をひっくり返した歴史があります。ハーフェズ・アサド政権は一九六三年のクーデター組を追放していたわけですから、サーレハさんが「第一次バアス革命へ反抗」したとしても、ハーフェズ・アサドも同じく反抗したわけで、大いなる矛盾です。ということで、そもそも告訴内容自体も、はっきり言って無茶苦茶な言いがかりではないでしょうか。あらゆる告訴内容は形式的な形で、公判記録はあるのでしょうけれども、ほとんど無意味と化してるっていうのが私の理解なんです。この点についてはイラクとか他の地域はどうなのかというこ

とも聞いてみたいと思います。

最後の質問は、陰謀論ですか。先ほど挙げましたシリアの思想家サーディク・アズムさんが、九・一一事件のときに日本にいたんですよ。日本にいたときに事件が起こったので、日本の人からは「イスラームとは一体何だ?」と聞かれ、その後にダマスカスに帰ったら、「九・一一事件は陰謀だ、アメリカの自作自演だ」という話を多々耳にするわけです。[41] とにかくシリアに関しては、そういう話が多いのは事実です。先ほどのパトリック・シールでもいいし、遡れば「アラビアのロレンス」ことT・E・ロレンスでもいいですが、さまざまな諜報機関やそれと関わっているエージェントの動きというのは常にあるとは思います。しかし、政府への抗議デモに関しては本当に多くの人が繰り出して、本当に多くの人が亡くなって、本当に多くの人が心をくじかれているという現実があります。もし、陰謀なのかなと思ったら、少なくとも百人のシリア人と話してみて、それでやっぱり陰謀だと思われるんだったら陰謀だと思ってくださいというのが、私の答えです。

山本　酒井さんの方から、こうした政治囚や思想犯の裁判について、もしご存じのことがあったら教えていただけますか。

酒井　私もほとんど知らないし、恐らく、岡崎さんがおっしゃったようなことだと思います。基本的には、サッダーム・フセイン政権下は、本当にちゃんとやってるのかどうなのか分からないっていう、要するにお手盛りでできていたのかなっていう感じはします。そういった記録にアクセスするのは、非常に難しかったんだろうと思います。その関係でよく言われるのが、シリアについての本も出されているハンナ・バタ

トゥ[42]っていう大先生です。パレスチナ人で、もう亡くなりましたけれども、この人がイラクについてものすごく分厚い本をプリンストン大学から出していて、イラクの共産党が収監されて、どういう状況だったかっていうことについて、警察の内部資料を全面的に使って書いてるんですね。

それが本当に詳細で、どうやってこんなものを手に入れたんだろうっていう話が、やっぱりイラク研究者の間で話題になって。一部の、特にイラク国内の研究者に言わせると、あれはやっぱりハンナ・バタトゥがパレスチナ人だっていうこともあって、その当時のナショナリスト政権にいろいろコネがあって、アクセスできたに違いないと。要するに、普通の国内にいる研究者、一介の研究者が簡単にアクセスできるようなものでは決してないし、それを使って論文を書くっていうこと自体、それを持って海外に出られるっていうこと自体が、非常に恵まれた環境なんだと。だから要するに、警察資料を使って論文を書こうという人が他に出ないんですね。バタトゥが非常にラッキーだったからできたっていうことになっています。それぐらいに警察記録、公判記録っていうのは闇の中というふうに、恐らく今でもそうだと思います。残念ながら。

山本　鵜飼さんはいかがでしょう。例えば、軍事政権下の韓国の政治囚の問題に、関わられたこともあると思うんですけれども。

41　このあたりの経緯については、SadiK J. Al-Azm, "Orientalism and Conspiracy" In *Is Islam Secularizable?: Challenging Political and Religious Taboos*, Gerlach Press, 2014, pp.57-85を参照。

42　ハンナ・バタトゥ（一九二六〜二〇〇〇年）　パレスチナ出身の政治史家。ジョージタウン大学名誉教授。主著に、Hanna Batatu, *The Old Social Classes and the Revolutionary Movements of Iraq: A Study of Iraq's Old Landed and Commercial Classes and of Its Communists, Ba'thists, and free officers*, Princeton University Press, 1978.

鵜飼　韓国の場合、今でも検察とのせめぎ合いが文在寅政権との間にあるように、決定的な点では法律が変わっていないこともあって、警察の記録が簡単に手に入るような状態ではないと思います。ただ、在日朝鮮人祖国留学生で名誉回復を求めた人については、当時の資料が出てきて復権されるケースがいくつかあるようです。一方で朝鮮半島の場合、ある意味ではシリアと同じタイプの政権が支配する国家とこれから統合していかなければいけないという課題があります。これは忘れてはいけない巨大な歴史的条件であって、半島の両国家の統一が進むなかで、朝鮮戦争までさかのぼる様々なケースについて資料が出てくるのかどうか。当然米軍が関わったものもありますね。米軍が関わっているから出てこないっていうこともありうるわけですよね。八〇年の光州まで米軍は関わっているわけですから。二〇一五年末の日本政府と韓国前政権との慰安婦問題に関する「合意」についてさえ、アメリカからの圧力に関することは韓国の政権が代わってもなかなか出てこない。そういう条件の下で資料、公文書へのアクセスも限界がある。ただ、それはアラブ諸国で文書にアクセスが困難であるということとは、だいぶ性格の違うものだろうと思います。

山本　民主化を達成した韓国でも、政治囚の真実を明らかにしたり、さらに名誉回復ということまで考えると、本当に先が長い話で、それをシリアやイラクと比較してみると、それこそ気が遠くなるような、長い取り組みが必要なんだなっていうことを、考えさせられますね。

　また、先ほど岡崎さんに答えていただいた、シリアの反体制運動があおられたものであって、シリアの人たちが自発的に望んだものではないんじゃないかという疑問に関しては、岡崎さんのお話の中でも触れられていた、シリア人自身の証言とか、ドキュメンタリーであるとか、そういったものが日本でも、ここ数年の間に非常に数多く出るようになってきています。このヤシーンさんの本もその一つであるわけですが、シリ

ア人たちがどういう思いで二〇一一年の革命に身を投じたのかとか、このヤシーンさんの本に書かれているような事態が以前から続いているんだということを、国際社会に振り向かれることもなく、隠蔽される中でも屈せずに訴え続けてきた。そういう雄弁でリアルなシリアの人たちの生の声を聞く機会というものもぜひ持っていただければ、おのずと分かることではないかなというふうに思います。

最後にもう一つ、会場からの質問を紹介したいと思います。今のシリアの政治体制は王朝化してしまうのか、それともアサド大統領が亡くなることで何か変わるのでしょうか。それともこの監獄体制というのは、新たな敵を見つけて形を変えながら続いていくのか。つまり、このシリア、あるいは中東における監獄体制は風土なのかという、非常に大きな問題をはらんだご質問をいただきました。これは酒井先生も黙っていられないのではないかと思いますので、先に酒井先生にお答えいただき、最後に岡崎さんからまとめの言葉をいただきたいと思います。

酒井　先程もちょっと申し上げたんですけれども、フセイン政権時代の監獄体制っていうのは、本当にアサドの時代と似てるなって思います。そういうビフォー・アンド・アフターみたいな位置付けでコメントさせていただいたんですけれども、その意味では、サッダーム・フセインがいなくなったら監獄体制も終わるのかっていったら、実は全然終わってなくて、イラク戦争後には監獄体制はちゃんとアメリカにも引き継がれたわけなんです。つまり、アメリカ占領下のイラクでの監獄体制っていうのは、まさにフセイン政権がやったのと同じような感じで、軒並みしょっぴいてきて自白を強要するみたいな、体罰あり、拷問ありみたいなこともやってたわけなんです。これがものすごく面白いなと思ったのは、サッダーム・フセイン政権のときには、恐怖と、シンボルとしての監獄が確立されていたので、それに対して批判とか非難とか、大きな抗議

の声が国内から上がるっていうことはなかったんですけど、アメリカがコントロールする監獄体制に切り替わった途端に、ものすごく批判が出たんです。

つまり、アメリカのやることに対しては、どこに批判を持っていったら届くのかっていう認識がイラク人の間で確立されていたってことが、すごいなってちょっと思っています。フセイン政権下では声を上げても絶対どこにも届かない、とあきらめていた人たちが、です。その意味で、さっき世代交代っていいましたけども、どこかに持っていったら、今のこの監獄体制を批判することができるんだ、訴えてやめさせることができるものなんだっていう体験を、一時期、少なくともイラク戦争後十年近くしたわけなんです。今、反旗を翻している反体制派の人たちに対して、まさに監獄にいた人たち、かつて監獄にいて舞い戻ってきたような人たちが、今度は逆に銃を向けて、それをどんどんしょっぴいちゃっている。

そうすると、さらに面白いと思うのは、アメリカのやることだったらば、どこに文句を言っていいのかイラク人は分かる。それこそニューヨーク・タイムズかなんかに投稿すればいいんだっていうのが分かる。その流れを経て、今、自分の政権に対して反政府暴動をやってる人たちの間には、まだ恐怖が生まれてきていないんですね。それはなんでかっていったら、抗議している人たちは、銃を向けている治安機関に対して、「あんたたちは自分たちの政権のはずだ。自分たちが選挙で選んだ政権のはずなのに、サッダームと同じような監獄体制を敷こうとしている」っていうところで、ますます反発が強くなっているからなんです。支配者側が三者三様に違っていても、監獄体制は全部同じように敷かれていて、そのメカニズムはあまり変わらないのですけども、弾圧を受ける側がそれをどう受けとめるかっていうところの三者三様の違いっていうのが、すごくクリアに出ていることが、とても面白い。その意味では、一般論としての監獄体制に対して、さまざまなルート、さまざまなメソッドで、彼らは抵抗しようとしているっていうところが、ダイバーシ

ティーがあってとても面白いなっていうふうに思っています。

岡崎　一言で言えば、「アサドはもはやシリアの大統領ではない」っていうことだと思います。とにかく二〇一五年以降にはロシアが武器だけじゃなくて兵士も送っていますが[43]、「アサド政権だけだともたない」と分かっていたのだと思います。シリアが今後どうなるかは、もはやシリア人の手にはなく、それはもうロシアの手に、すなわち全て読み替えられた世界にあるということだと思います。それは、みんな分かっていることではないでしょうか。ですので、「王朝化」っていうのは、この先どこまでロシアが自国の利益のためにアサド体制をさんざん利用するのか。今のプーチン体制、もしくは今後のロシアの体制のために有用だと考え続けるかと、そこにかかってくると思います。

とはいえ、サーレハさんも言うんですが、イスラエルに対するアメリカの国家としての後ろ盾ほど、アサド政権に対するロシアの国家としての後ろ盾は盤石ではないし、それほど意味を持ってるわけではないというのも確かかと思います。もちろんアメリカで大統領になるためには、ユダヤ人票というのは常に必要なわけで、そうするとパレスチナ問題の場合はものすごく複雑な矛盾が、本当に強固な形で蓄積しています。しかし、アサド政権に関しては、ロシアは依然として利用価値があるということで利用しているわけで、もし本当に、やっぱりいらないんじゃないかと思った瞬間、新しいダイナミズムが起こるっていうことについても、みんな分かっていると思うんですよね。

43　二〇二〇年九月二八日付毎日新聞が露紙コメルサントを引用しつつ伝えるところによれば、露軍機は二〇一五年から二〇一九年までにシリアで約四万回出撃し、十二万件以上の標的を破壊したという。

今、そのダイナミズムが生まれる兆しがみえていると思います。先ほど言いました大統領のいとこのラーミー・マフルーフですが、最近自身の会社や権益を放棄しろという圧力をロシア側から受けていると報道されています。マフルーフを放逐する腐敗対策を主導するのが、バッシャール大統領の妻のアスマー夫人らしいです。これもものすごく矛盾しているんですけども、とにかくロシアもアサド政権自体を現状のままにしておくということに、それほど意義を見出していないということです。微妙なところで少しずつ変わっている。このような国際環境の中に置かれたシリア情勢をめぐって、どこに亀裂があるのかというのを常に見ていくことが大事なのではないかなとは、私は常に思っています。

山本　ありがとうございました。シリアの問題は、今やシリア人の手だけでどうにかなるものではないというのは岡崎さんがおっしゃったとおりでもあるし、逆に言うと、国際社会の関わり方によって大きなゲームチェンジがいつでも起こり得るっていうことでもあるんじゃないでしょうか。国家っていうことだけじゃなくて、私たち一人一人が、どのようにシリアの問題に関わっていくのかということが改めて問われていると思いますし、ヤシーンさんの問い掛けというものに、いかに読者である私たち一人一人が応えていくかっていうことを改めて考える機会にしていただければと思います。まだお読みでない方、ぜひ、この素晴らしい本を読んでいただいて、また別の機会に議論の続きができればいいなと思っております。

2－5　アフタートーク

岡崎　現代シリアの経験を他国の事例と比較したときに何が普遍的で、何が独自かということを知りたかっ

たので、今日のセミナーでイラクや日本の近隣諸国の事例を知ることができて有意義でした。シリアの問題をシリアだけで語るとなると、知っている方や関心のある方にはいいのですが、知らない人にもどうやって興味を持ってもらえるのかなとなったときに、先ほど、京都の電柱に「徐勝さんを助けろ」って書いてあったと鵜飼さんがおっしゃっていたことは印象的でした。このような日本国内での経験と実は同じ問題なんだということが、もっと伝わればいいなと思っています。

酒井　話がずれちゃうかもしれないんですけども、獄中から出てきた後の家族の問題っていうのにすごい関心があって。獄中にいるにしても、あるいはイラクの場合、ずっと長いこと戦争やってたものですから、お父さんがいない子どもって、すごく多いわけですよ。そうすると、お父さんが戦争であれ、監獄であれ、俺は苦労してきたんだっていう、ものすごい責務を背負っているけど、子どもは、俺はお父ちゃんなんて関係なしに大きくなったんだいっていう、そういう世代間ギャップっていうのがばかにならないような気がしていて。そこがアラブ社会の場合、決定的なような気がして、その辺り、シリアってどうなのかなって思っていて。イラクは、そんなので家庭崩壊したみたいな話って、結構、あったりするのですけど、どうですか。

山本　それこそ岡崎さんが紹介された、作家のイブラヒーム・サミュエルさんが、実体験を踏まえて、刑務所に入ったお父ちゃんを子どもが訪ねてくるといった短編を書かれていますよね。たとえばああいう子が大きくなって、「俺は獄中にいたんだ」なんて言うお父さんに、そんな昔の話で威張るなよ、みたいなことってあったりするんですかね。

岡崎　第四章「シリアの元政治囚の世界」などに描かれた人はそういう感じですね。必ず息子か娘に嫌われるっていうの、ワンパターンですけどもね。韓国もそうでしょうか。「俺は豚箱にいたんだ」みたいな。よくあるパターンですけども。

鵜飼　この問題はとても複雑な形でいろいろ作品化されてもいます。サーレハさんはとてもあっさりと「象徴資本」はあっという間になくなってしまうと言っていて、とても面白かったです。日本から韓国の独裁時代のことを考えようとする場合には、こちら側が歴史的な複雑さを抱えているので、なかなかサーレハさんのような立場に立てないのですが。今韓国ではフェミニズムが非常に強くなっています。またフェミニズムの中にいろんな潮流があって他の国々には見られないほど激しい展開になっていることが伝わってきます。その背景に若いフェミニストたちの親の世代、まさに民主化運動の世代ですよね、その世代が主張する歴史的権威に対する異議申し立てみたいなものがあるでしょう。それは、酒井さんが先ほど触れられていた、昨年のイラクでの反乱の一番若い世代と、同時代性があるのかもしれないって気がしますね。

私より少し若い世代の韓国の研究者から、民主化運動時代の英雄的な詩人がカラオケなどで醜態をさらしているのを見たという話を聞いたことがあります。あの人たちは長く獄中にいて拷問を受けたりしていたので仕方がないという目で見ていると言っていましたが。

山本　ちょっと今日は時間がなくて、女性についての話を取り上げることができませんでしたが、サーレハさんのサミーラ夫人も、政治囚として何年か投獄された経験があるわけですけど、この著書の中では、女性の政治囚の経験についての考察っていうのは、割とさらっと流しているような印象がありました。

そこでちょっと考えてみたんですけど、日本でもパレスチナ人女性の政治囚のことを描いた本とか映画はいくつか紹介されていて、『Women in Struggle――目線』（ブサイナ・C・ホーリー監督、二〇〇四年）というドキュメンタリーは特に衝撃的でした。これは、イスラエルの刑務所に収監されていたことのある、パレスチナ人女性四人のドキュメンタリーです。中東の刑務所に入ると、性的な拷問を男性が受けるという話は多々あるのですが、女性の場合もやっぱりあって、それが原因で、釈放後に性的関係が持てなくなって離婚したとか、あるいは、結婚前の女性の場合には結婚相手が見つからないとか、いろいろな苦悩があります。実際に性的拷問を受けてなかったとしても、当然、そういう目にあったんだろうというふうに社会からは見られてしまう。

そうした時に、女性が働いて自立できるような環境がなかなか整ってない社会だと、本当に苦しいわけです。サーレハさんも書かれていますが、やっぱり家族しか支えてくれる人がいないんだけど、女性の場合には、今お話ししたような背景があると、男性親族にはなかなか理解してもらえないといったことがある。その一方で、同じ投獄経験がある男性と結婚して幸せになっているみたいな話もあったりはします。男性も性的拷問を受けるので、女性ならではというわけでもないんですけれども、特に社会的なレッテルの問題を考えると、女性囚の話っていうのも、もうちょっと考察の中に入ってくると、さらに興味深かったかなと思いました。

あと、先ほど鵜飼さんが一般の刑事囚との交流とか、共感みたいなことについてお話しされていましたが、政治囚に対する精神的虐待の一種として、殺人犯とか、麻薬ディーラーなんかと、あえて同じ房に入れるっていうような話は、監獄経験を題材にした小説などによく出てきます。小説といっても記録や経験に基づいているはずなので、フィクションというわけでも恐らくないと思います。そういう中で、一部、エリー

ト主義の政治犯の場合には、こんなのと一緒にしないでみたいなことがあるかもしれないけど、日本でもよく知られて翻訳もされているエジプトのナワル・サアダーウィっていう有名なフェミニストであり、政治活動家でもある作家の獄中記や、自身の投獄経験を基に書いた戯曲『カナーティルの十二人の女囚たち』（未来社、一九九二年）なんかを読むと、また違った話が出てきます。貧しさとか、虐待とかが背景にあって、売春や麻薬なんかの犯罪に手を染めた女性たちと同じ刑務所に入れられた彼女が、むしろ仲間意識というか、連帯意識を持つようになって、これは全部国のシステムが悪いんだ、一緒に国を変えようという意識が生まれたというようなことが書かれていたことも思い出したりしました。中東には監獄体験記とか、監獄小説とか、すごく多いので、そうしたものを比較してみる会も、またできるといいですね。

鵜飼　そうですね。そこは私も大変関心があります。エジプトのカイロにいたとき、どういう経緯かは分からないけれども捕まった人たちが警察の護送車に収容されているところに出会ったことがあります。ほとんど移動拘置所のようになっているのですが、鉄格子を隔てて町の人がすぐ前を歩いているという、ちょっと想像できない扱いを受けていました。この人たちは政治犯じゃないと思いますが、そもそも、アラブの警察機構の中で犯罪者といわれる人たちがどういう処遇を受けているかという問題は、山本さんが言われるように、サアダーウィさんの世代の女性の経験の中では、ある程度、広がりがあったのかなという気はします。

　世界史的な比較でいうと、ナチの収容所、プリーモ・レーヴィが描いたアウシュヴィツのような世界、それからソ連のソルジェニーツィンの『収容所群島』のような、世界文学的によく知られている世界があります。今回のサーレハさんの著作の重要な点は、シリアの中でもこれだけ歴史的、地政学的に、多様な監獄があるということを明らかにしたことで、それだけですごいインパクトがあるような気がするんですよね。あ

と、現在の監獄の起源ということについて、韓国との比較にもう一回戻るんですけど、パルミラ監獄がフランスの植民地統治時代につくられたものだっていうことは、独裁期の韓国で一番悪名高かった西大門刑務所が日帝時代の遺産だったことと重なります。植民地期から継続している弾圧の在り方、受け継がれているものが、シリアの場合にも明らかにあると思うんですよね。

監獄行政のポストコロニアル性みたいなものを、どういう方法で比較研究できるのか。もうそういう研究はあるのかもしれませんけど、あったらぜひ知りたいなと思います。

岡崎　今のポイントに関して言えば、もともとは一九世紀の後半にオスマン帝国のタンジマートの中で、秘密警察をつくるというのもフランスから学んだわけです。普通の警察じゃなくて秘密警察というのは。

鵜飼　日本だって大逆事件はフランスのまねですからね。

岡崎　ですから、近代化の初期から、そういうものを学びながら、脈々と形成された「内なる国家」というのを常に伝統として、アラブだけじゃなくて、オスマン帝国の末期からつくられているというのはあると思いますね。

鵜飼　フランスで今、刑務所内でイスラーム主義の聖戦派（ジハーディスト）が形成される構造になっていることとかね。一体、監獄というシステムは、近代だけを見ても、どれだけの予期せぬ結果を生んできたのか。そういうことも今回の本で、また別の角度から光が当てられたように思います。

岡崎　もう一つ、一般犯罪についていえば、このような腐敗した国家だと、腐敗経済の一部になってしまっていると思います。恣意的に拘束した上で「保釈したいんだったら幾ら出す?」みたいなところで経済が成り立っている。その一方で政治犯は賄賂だけではなかなか釈放されません。そうすると、一般囚の釈放運動に関しては西洋社会をモデルとした自由や理性、合理性などを基盤とした運動を想定することはできず、むしろ賄賂政治の中の、マフィア経済との関わりみたいなのが強いという文脈で考えるべきではないでしょうか。

山本　コロナ禍で打ち上げができない代わりにアフタートークということで、しばらく余韻を楽しんでいただけたかなと思いますが、これで締めさせていただこうと思います。皆さん、ありがとうございました。